長崎県文化財調査報告書 第187集

長崎県埋蔵文化財調査年報13

〔平成16年度調査分〕

2006

長崎県教育委員会

長崎奉行所（立山役所）跡　　11・10・9

長崎奉行所（立山役所）跡　　柿右衛門様式（狭義）

長崎奉行所（立山役所）跡　　柿右衛門様式（広義）

長崎奉行所（立山役所）跡　　灯心押

長崎奉行所（立山役所）跡　　肥前色絵 1

長崎奉行所（立山役所）跡　　肥前色絵 2

はじめに

長崎県には，先人が古くから育んできた数多くの文化財があります。なかでも国指定特別史跡「原の辻遺跡」に代表される貴重な遺跡や埋蔵文化財は，遠い祖先の暮らしぶりを伝えてくれる歴史的な遺産であり，これらを地域の財産として後世に保存・継承・活用していくことは，現代に生きる私たちの責務であります。

そのため，本県においても，埋蔵文化財の発掘調査等や「原の辻をもっと知ろう塾」など，文化財の保護・活用に積極的に取り組んでいます。

本書は，平成16年度に県が中心となり，県下各地で実施した埋蔵文化財の発掘調査と遺跡の保護・保存・活用のための諸事業の概要を，年報として紹介するものです。

今後とも，本県の文化財保護行政に対するご理解をいただきますとともに，本書が多くの皆様に広く活用されることを期待します。

平成18年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　立　石　　暁

例　　言

1　本書は，長崎県における埋蔵文化財保護行政の現状と長崎県教育委員会が平成16年４月１日から平成17年３月31日までに実施した13カ所の発掘調査の概要を収録したものである。

2　各遺跡の調査概要中の位置図は，国土地理院発行の地図を使用し，［　］内は図幅名を表す。

3　本書に掲載した遺跡には，県教育委員会が主体となって発掘調査したもの，市町村事業に伴い調査対応したもの，市町村教育委員会による発掘調査を支援したものを含む。

4　平成７年度分より，壱岐・原の辻遺跡調査事務所関係の発掘調査については，調査事務所の調査年報に概要を収録することにしている。

5　各遺跡の調査担当者と調査概要の文責については，文末に記した。

6　本書の編集は，長崎県教育委員会学芸文化課 文化財保護主事 和田政則が行った。

本　文　目　次

はじめに

Ⅰ　長崎県の埋蔵文化財の動向

一　埋蔵文化財保護行政の現状 …… 1

二　県事業について …… 3

三　県内の調査動向・研究活動（文献一覧） ……15

四　長崎県教育委員会発行調査報告書一覧 ……24

五　事業別発掘調査届出件数及び県市町村別埋蔵文化財職員数の推移 ……30

Ⅱ　各遺跡の調査概要

平成16年度長崎県内発掘調査箇所 ……31

① 長崎奉行所跡（長　崎　市）……32～34

② 出島（和蘭商館）跡（長　崎　市）……35

③ 門　前　遺　跡（佐世保市）……36～39

④ 竹辺Ｃ遺跡（佐世保市）……40～41

⑤ 竹辺Ｄ遺跡（佐世保市）……42～43

⑥ 竹辺Ｄ遺跡（佐世保市）……44～45

⑦ 竹辺Ｄ遺跡（佐世保市）……46～47

⑧ 武　辺　城　跡（佐世保市）……48～49

⑨ 開　　遺　　跡（諫　早　市）……50～51

⑩ 獅子第１遺跡（平　戸　市）……52

⑪ 魚洗川Ｂ遺跡（雲　仙　市）……53～54

⑫ 久留里遺跡（時　津　町）……55～56

⑬ 浜　郷　遺　跡（新上五島町）……57～59

Ⅰ　長崎県の埋蔵文化財の動向

一　埋蔵文化財保護行政の現状

1　埋蔵文化財をめぐる情勢

全国的にみて，近年の埋蔵文化財保護行政をとりまく情勢は大きく変化している。ことに，国・地方を問わず，財政状況の悪化に伴って行政のスリム化が進行している。具体的には人員の削減・コストの縮減・民間活用・市町村合併である。さらには，地方分権の流れに沿った県から市町村への権限移譲の動きもある。長崎県も，これらの全国的情勢の影響から免れない状況にある。以下，本県の情勢を個別に見ていくことにする。

2　埋蔵文化財保護行政の体制

市町村も合わせた長崎県全体の専門職員数は，平成16年度で92名，そのうち28名が嘱託職員である。15年度と比較すると全体で10名の増加で，うち６名は嘱託職員である。増加した人員のほとんどは，県教委がおこなう西九州道路建設に伴う埋蔵文化財調査に従事する職員であるが，増員者は教員からの出向ないし嘱託職員で，正職員の新規採用者はいない。

市町村の専門職員数は15年度と比較して変化はない。合併により71市町村（平成16年５月１日現在）となり，そのうち30市町村に設置され，設置率は42％である。

3　発掘調査事業量

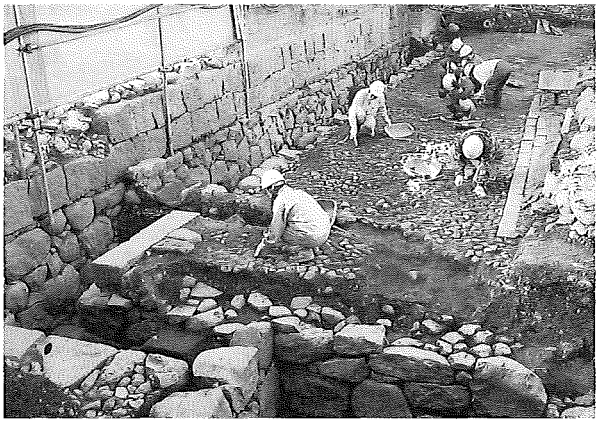
平成15年度の長崎県全体の発掘調査事業量は本調査分で約７億９千万円ほどで，14年度より１億円ほど上回った。九州各県で事業量の減少がみられるなか，沖縄県と共に増加している。この原因としては，西九州道路建設に伴う事業量の増加があげられる。さらに平成16年度の発掘調査事業量は約９億９千万円ほどで，15年度に比べて約２億円増加している。全国的な統計はまだ発表されていないが，全国的に事業量が減少しているなかにあって，西九州道路建設によって本県の事業量は増加しているといえる。また，平成16年度の長崎県の事業量の内訳をみると，市町村教委によるものは，15年度に比べると５千万円ほど減少しており，このことは，地方自治体による開発事業の減少の影響が窺えるといえよう。

4　市町村合併

長崎県でも平成15年度末に対馬の６町が合併して対馬市に，壱岐の４町が合併して壱岐市になって以来，次々と合併され，16年度には佐世保市（１市２町が合併），五島市（１市６町が合併），新上五島町（５町が合併），長崎市（１市５町），諫早市（１市４町）が誕生した。しかし，いずれも専門職員の増員はなく，職員が管轄する行政区域が広域化しているのが現状である。

5　民間調査組織への委託

長崎県では，県教委を中心に平成14年度より民間調査組織への委託をおこなってきたが，16年度も歴史博物館（仮称）建設工事に伴う長崎奉行所跡発掘調査事業ならびに一般国道497号佐々佐世保道路発掘調査事業において調査委託をおこなった。本県の民間調査組織への委託は，県教委の調査組織のなかに組み込む形でおこなっており，調査現場では県教委の調査員と民間の調査員が共に発掘調査に従事し，整理・報告は県教委が直営でおこなっている状況である。



（長崎奉行所跡：発掘調査風景）

（門前遺跡：発掘調査風景）

6　会計実地検査

平成16年度末から平成17年度前半にかけて，全国的に埋蔵文化財関係の補助金事務について，会計検査院による実地検査が行われた。本県においても，県・壱岐市・大村市・国見町で実地検査がおこなわれた。

（古　門）

二　県事業について

1　開発に伴う埋蔵文化財発掘調査

県学芸文化課では，各種開発行為に伴って現地踏査を行い，埋蔵文化財の取扱いについての協議を行って，文化財保護の観点から範囲確認調査を実施している。その結果に基づいて，遺跡保護のための協議を行うが，設計変更等でも遺跡を回避することができず破壊されている部分については，本発掘調査を実施している。また，県内の市町村事業に伴って県が調査を担当し，市町村の支援も行った。平成16年度，県学芸文化課が実施した試掘・範囲確認調査及び本調査と市町村支援として実施した調査（範囲確認調査）は，次のとおりである。

○　試掘・範囲確認調査

	遺　跡　名	所在地	調　査　原　因
1	竹辺D遺跡	佐世保市	県立佐世保養護学校建替工事
2	武辺城跡	佐世保市	西九州自動車道建設
3	開遺跡	諫早市	諫早飯盛線道路改良工事
4	獅子第1遺跡	平戸市	平戸田平線道路改良工事
5	魚洗川B遺跡	雲仙市	地域拠点遺跡発掘調査事業
6	浜郷遺跡	新上五島町	地域拠点遺跡発掘調査事業

○　本調査

	遺　跡　名	所在地	調　査　原　因
1	長崎奉行所跡	長崎市	長崎歴史文化博物館建設
2	出島（和蘭商館）跡	長崎市	国道499号電線共同溝整備工事
3	門前遺跡	佐世保市	西九州自動車道建設
4	竹辺C遺跡	佐世保市	西九州自動車道建設
5	竹辺D遺跡	佐世保市	西九州自動車道建設

○　市町村支援調査（範囲確認調査）

	遺　跡　名	所在地	調　査　原　因
1	久留里遺跡	時津町	教会建設

2　明日へつなぐ埋蔵文化財人づくり事業

本事業は，文化財担当者と開発部局担当者に埋蔵文化財に対する理解を深めてもらい，その取扱いについて具体的な情報を提供することにより，円滑な埋蔵文化財行政を推進する。併せて，埋蔵文化財担当者に専門的な知識を習得する場を提供することにより，埋蔵文化財の保護と活用を図ることを目的として実施している。

○　開発部局・文化財保護部局担当者埋蔵文化財基礎講座

期　日　平成16年７月13日（火）～14日（水）

場　所　長崎県勤労福祉会館　２階講堂

対象者　①　県・市町村の開発事業計画及び実施担当者

②　市町村教育委員会文化財担当者

③　県文化財保護指導委員，市町村文化財保護審議会委員，教職員他

内　容　第１日目（参加数：122名）

①　開発事業と埋蔵文化財保護行政　　（①～③：県学芸文化課　埋蔵文化財班）

②　埋蔵文化財の事務処理について

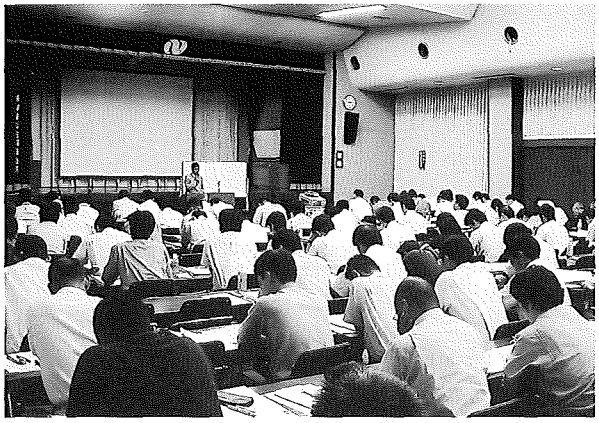
③　平成15年度の長崎県内の緊急調査

④　埋蔵文化財保護行政の現状と展望　　（文化庁記念物課文化財調査官　玉田　芳秀）

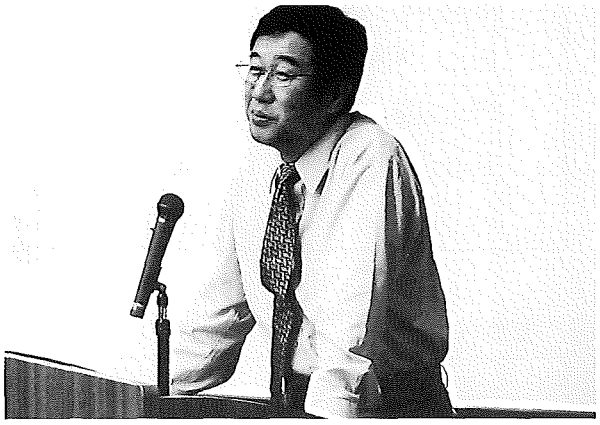
第２日目（参加数：83名）

講義「土器が語る弥生時代～弥生時代研究の史料学」

（愛媛大学法文学部教授　田崎　博之）



（第１日目：熱心に聴講する参加者）



（第２日目：田崎　博之先生）

（開発部局・文化財保護部局担当者埋蔵文化財基礎講座）

○　長崎県市町村文化財担当者会議

期　日　平成16年９月９日（木）（参加数：68名）

場　所　長崎教育事務所７階大会議室

対象者　市町村教育委員会文化財担当者

内　容　①　子ども伝統芸能大会等について　（県学芸文化課　文化企画班）

②　国庫及び県費補助について　（県学芸文化課　文化企画班・埋蔵文化財班）

③　零細業者補助の基準について　（県学芸文化課　埋蔵文化財班）

④　近代和風建築について　（長崎総合科学大学教授　村田　明久）

⑤　美しいまちづくりの制度紹介　（都心整備室）

⑥　事例発表

・外海町における遺跡の整備と地域活用の取り組みについて

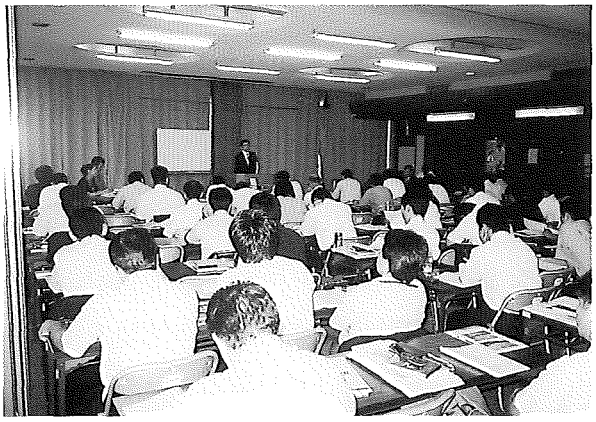
（旧外海町教育委員会　中村　和正）

・対馬市における合併後の文化財保護行政の取り組みについて

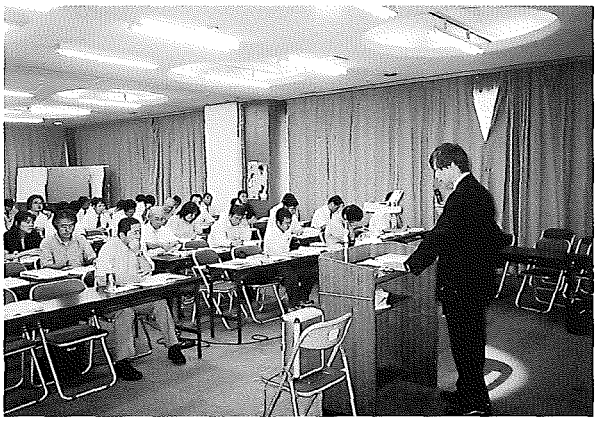
（対馬市教育委員会　宮脇　好和）

・壱岐市における合併後の文化財保護行政の取り組みについて

（壱岐市教育委員会　河合　雄吉）



（国庫及び県費補助について）



（村田　明久先生）

（長崎県市町村文化財担当者会議）

3　重要遺跡情報保存活用事業

本事業は，開発事業との円滑な調整と文化財を活かした地域文化の振興を図るため，県内3,800ヶ所数える遺跡の発掘履歴等のデジタル情報の整備，諸開発に対する予備調査，県内重要遺跡の内容確認調査を，平成14年度より国庫補助金事業を受けて実施している事業である。

（1）遺跡情報システム整備事業

遺跡台帳と発掘調査で検出された遺構・遺物や写真・図面等の情報と調査履歴等をデータベース化して，開発調整や歴史教材の資料として活用する。また，遺跡の内容や調査履歴等の資料提示を迅速化させ，開発側との速やかな協議・調整を図るために実施している。平成16年度は，遺跡地図データの作成を中心に作業を行った。

（2）地域拠点遺跡内容確認調査事業

県内155ヶ所の重要遺跡のうち，55ヶ所について内容確認調査を実施して遺跡の価値付けを行い，遺跡情報システムと連携させ，開発と遺跡の保存活用のための基本資料を整備する。本事業の最終年度である16年度は，次の2遺跡の調査を実施した。

遺跡名		所在地	調査原因
1	魚洗川B遺跡	雲仙市	地域拠点遺跡発掘調査事業
2	浜郷遺跡	新上五島町	地域拠点遺跡発掘調査事業

（3）開発事業関連予備調査

本事業は，分布調査（事業対象地区に遺跡が含まれているかの有無を，現地踏査によって判断する）試掘調査（事業対象地区に未周知の遺跡が存在しているのかどうかの有無を，発掘調査によって判断する）・範囲確認調査（事業対象地区に周知の遺跡が含まれ，埋蔵文化財に影響を与える行為が計画されている範囲を対象として発掘調査を行い，遺跡の範囲を確定する）などの予備調査を行い，開発事業との円滑な調整を図ることを目的とし，年間4遺跡程度，5年間で20遺跡の調査を実施する計画である。なお，開発事業に伴う予備調査は，「文化財担当部局で負担することが望ましい」との文化庁の指導があり，調査のための経費については，国庫補助を受けて実施する。平成16年度は，次の4遺跡の5件の範囲確認調査を実施した。

遺跡名		所在地	調査原因
1	竹辺D遺跡	佐世保市	県立佐世保養護学校建替工事
2	竹辺D遺跡	佐世保市	県立佐世保養護学校建替工事
3	武辺城跡	佐世保市	西九州自動車道建設
4	開遺跡	諫早市	諫早飯盛線道路改良工事
5	獅子第1遺跡	平戸市	平戸田平線道路改良工事

4　原の辻遺跡保存整備事業及び保存活用事業

中国の歴史書『魏志倭人伝』に記載された「一支國」。その王都に特定され，国特別史跡に指定された原の辻遺跡では，地域振興の核として活用するための保存整備事業及び保存活用事業を実施している。

（1）保存整備事業

①　遺跡内の土地公有化　②　調査研究事業（発掘調査）

平成16年度の調査は，前年度に引き続き，原地区・高元地区・石田高原地区の3地区で実施した。原地区は，前年度と同じく祭儀場南側の調査で，東西に伸びる2条の環濠と切り合うような周溝状遺構の一部を検出したため，調査区を設定して調査を実施したものである。この調査では，面的に広げて周溝状遺構の平面形を確認するとともに，6カ所のトレンチを設定して精査した。その結果，弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構の変遷が明らかとなった。特に，弥生時代終末期に周溝状遺構が存在した事を確認できたが，このことは，祭儀場の構成を把握する上で貴重な成果となった。出土遺物としては，土器が主体であり，器種構成は，鉢・小型短頸壺・小型丸底壺・ミニチュア土器など祭祀に関係するものが多い。鉄製品としては，実用品とは思えないような長軸方向にねじれた鉄鎌や厚みが均一でない鉄剣，その他不明鉄片等があり，ガラス小玉も出土している。総じて祭祀に関連すると思われるものが多く出土している。

高元地区の調査は，原の辻遺跡丘陵部の旧地形の復元と，未調査箇所の遺構群の把握を目的として幅4ｍ，南北約200ｍのトレンチを設定し20ｍおきに区分して北からＡ区～Ｉ区とした。これらの調査区は，地籍上深江鶴亀触字原から字高元まで含むが，上述した原地区の調査区と区別するため高元地区と呼称する。高元地区の調査成果は，複数の文化層が存在する事を初めて確認した事である。堆積物の供給が少ない台地上にあって，複数の文化層が存在する事は，人為的な造成も考えられ，今後は土地改変の規模等を確認する事が必要だろう。その他Ｆ区で，土器溜まりを確認しており，この場所に不要になった土器を廃棄したものだろう。石田高原地区は，北東低地部の環濠のつながりを確認する事を目的に実施したものである。本年度の調査では，弥生時代中期の段階で，環濠が分岐・合流を繰り返している事が確認された。これまでの調査でもわかっていた事だが，改めてそのことを確認する事となった。その他の成果と問題点としては，高元Ｄ区ＳＫ１（弥生時代中期前葉）から出土した炭化コムギを加速器質量分析法（ＡＭＳ）で測定したところ，2,080年±40年ＢＰという値が出ている。コムギの年代としてはかなり古いもので，原の辻遺跡の農耕活動を考える上で興味深い成果も出ている。

（村　川）

（２）保存活用事業

① 原の辻遺跡調査事務所及び壱岐・原の辻展示館の管理運営

② 調査指導委員会の開催（第１回平成16年８月23日，第２回平成16年11月２日）

③ 「要覧」「原の辻ニュースレター（第19～21号）」の発行

④ 出土遺物の複製・保存処理

⑤ 調査記録ビデオの作成

⑥ 三姉妹遺跡（原の辻遺跡・吉野ヶ里遺跡・平塚川添遺跡）連絡会議及び交流事業

⑦ ホームページ管理運営

⑧ 原の辻大学講座「Dr. ハルの原の辻をもっと知ろう塾」（年６回）

第１回　日　時：６月17日（木）19時～21時　　会　場：壱岐文化ホール
　　演　題：「中国から見た原の辻遺跡」　　講　師：徐　　光輝（龍谷大学助教授）

第２回　日　時：７月29日（木）19時～21時　　会　場：壱岐文化ホール
　　演　題：「弥生人のおしゃれ関係」　　講　師：木下　尚子（熊本大学教授）

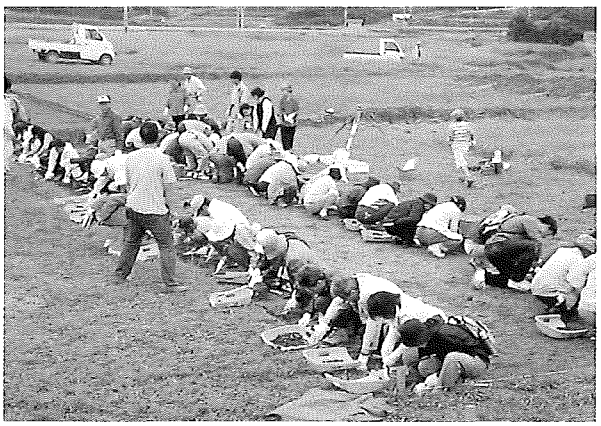
第３回　日　時：８月19日（木）19時～21時　　会　場：壱岐文化ホール
　　演　題：「壱岐にナウマンゾウがいた頃」　　講　師：稲田　孝司（岡山大学教授）

第４回　日　時：９月16日（木）19時～21時　　会　場：壱岐文化ホール
　　演　題：「東アジアと一支國の漁撈」　　講　師：甲元　眞之（熊本大学教授）

第５回　日　時：10月２日（日）12時30分～17時　　会　場：原の辻遺跡および壱岐市内遺跡
　　演　題：「発掘現場見学・体験発掘・島内史跡見学」
　　講　師：原の辻遺跡調査事務所所員・壱岐市教育委員会職員

第６回　日　時：11月18日（木）19時～21時　　会　場：壱岐文化ホール
　　演　題：「一支國人は何処へ行った？」　　講　師：武末　純一（福岡大学教授）

（林）



「発掘現場見学・体験発掘・島内史跡見学」

「一支國人は何処に行った？」（武末　純一先生）

5　日韓交流史理解促進事業

この事業は，日韓の文化財担当者を相互に派遣して文化理解を深めることを目的としており，平成13年度から実施している。平成16年度は，釜山広域市との派遣交流を実施した。

（1）長崎県からの派遣

①　派遣期間　　平成16年5月17日（月）～5月30日（日）

②　派遣職員　　長崎県教育庁学芸文化課　　文化財保護主事　川口　洋平

　　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所　文化財保護主事　林　　隆広

③　調査研究テーマ　「中近世の日韓交流について」（川口）・「韓半島における青銅器について」（林）

④　調査研究概要　　釜山広域市および周辺の遺跡・博物館施設の視察，出土遺物の実見

⑤　調査研究内容

5月17日（月）

○　出　国：博多港→釜山港（出迎：釜山市立博物館　河仁秀氏・柳順女氏）

○　釜山広域市文化芸術課訪問（対応：李圭浩課長・朴在赫氏）

○　釜山市立博物館訪問（対応：朴有盛館長・金洪源室長・宋桂鉉福泉博物館館長など）

5月18日（火）（同行：釜山市立博物館　柳順女氏・朴美郁氏）

○　釜山市立博物館

遺物整理室を視察。東三洞遺跡の遺物が整理中であった。東三洞遺跡は貝塚遺跡ということで，海洋性生物の出土が多く，鯨骨製の作業台や貝製の錘などが見られた。その後，博物館第1展示館を視察。第1展示館は原始から古代の遺物を中心に展示されている。コーナーごとに係員が控えており，見学者の監視や説明などを行っている。昼食をはさみ，午後より第2展示館を視察。中世から近世の遺物や文献などが展示されている。特に文禄・慶長の役や朝鮮通信使のコーナーが充実していた。

○　慶星大学校

金宰佑氏へ挨拶に伺い，その後博物館の視察を行う。博物館には大成洞古墳などの遺物を中心に展示されており，約1万点ほどの遺物を収蔵しているとのことであった。

（釜山市立博物館）

（慶星大学校）

5月19日（水）（対応：釜山近代博物館　柳鉉氏・釜山博物館　成炫周氏）

○　東亜大学校

車漢秀氏へ挨拶に伺い，その後博物館の視察を行う。博物館は2階に分かれており，1階には梁山勿禁製鉄遺跡（7～8ｃ），福泉洞古墳，固城東外洞貝塚（三韓時代），金海徳山里民墓群（朝鮮時代前期）などの遺物が，また2階には李朝の陶磁器などが主に展示されており，別室には国宝の安重根の書などが保管されていた。

○　慶南文化財研究所

釜山市の東に位置する昌原市に所在する研究所で，朴東百院長に挨拶後，崔鐘赫課長の案内で河東白蓮里窯跡出土の陶磁器を実見した。

○　熊川窯跡

鎮海市に所在する16世紀代の窯跡で，道の指定史跡となっている。肥前陶器の開始時期にも関係が深い遺跡であり，これまでの調査で6基の単室登窯が確認されている。

5月20日（木）（対応：釜山近代博物館　張慶俊氏・釜山博物館　崔問起氏）

○　東義大学校

博物館は新石器～三韓時代までの展示で金海良洞里古墳群の出土遺物を中心に展示されていた。

○　東三洞貝塚展示館

東三洞貝塚に隣接して新設された展示館で，面積263m^{2}と小さな展示館ではあるが，まとまりのある内容の展示がなされていた。

○　臨時首都記念館

もとは日本植民地時代の旧慶南道知事官舎で，朝鮮戦争の時に臨時首都となった釜山の臨時首都大統領官邸跡である。李承晩大統領および婦人の遺品などが展示されていた。

○　釜山近代博物館

日本植民地時代の東洋拓殖株式会社釜山支店の跡地に，2003年に新設された博物館で2階が釜山海港から韓国併合，3階が東洋拓殖会社の設置から韓米関係時代の内容で展示が行われている。

5月21日（金）（対応：釜山博物館　羅東旭・柳承勲氏）

○　塩浦跡（蔚山市）

塩浦は1426～1510年の三浦開港時期に乃而浦（又は薺浦，現在の熊川）・富山浦（現在の釜山）とともに日朝貿易の開港地であった港である。現在は蔚山広域市北区塩浦洞として地名にその名を留めており，現代（ヒュンダイ）自動車の工場群がひしめく輸出の一大拠点となっている。塩浦洞の塩浦三叉路には三浦開港地を記念した碑が建っている。

○　西生浦倭城

加藤清正が築城したと伝えられ，現存の倭城（日本式城郭）の中では最大規模で最も保存状態が良いものとして知られる。山上の城郭部と湊の間の平地を空堀と石垣で囲んだ構えは，それまでの織豊期の城では見られない形である。文禄期の築城と慶長期の補修の比較ができることから，

その間の西生浦倭城のおかれた環境や技術の進化を知ることができる。

○　西生羅士烽燧台

高麗時代から使用され，朝鮮王朝（李朝）の世宗の時代に整備された烽火台で，1894年に廃止される。標高210ｍの尾根上に位置し，煙台の高さは２ｍほどで円形である。

○　機張倭城

機張倭城は文禄２年に黒田長政が築城したと伝えられ，子城台という出城的な曲輪とそれを含んだ総構え的な城域をもつ。西生浦倭城が殆ど石垣で装備されているのに対して土塁が多用されていることが特徴で，本城の上側半分は石垣であるのに対して，下側半分は土塁と空堀で造られている。これはもともとこの地に朝鮮水軍の駐屯地（水鎮）があり，それらの城壁などを利用して築城されたことが理由と考えられる。

○　機張邑城

高麗時代の城壁を備える官衙で，東壁および西壁が現存している。現在も住民が利用している門跡は円形虎口になっている。

５月24日（月）（対応：釜山博物館　成炫周氏・魏順善氏）

○　慶南発展文化研究院

馬山市に所在する研究所で，崔部長の案内で熊川窯跡出土の遺物を見学した。

○　梵魚寺

梵魚寺は新羅時代（７世紀）に建てられた韓国五大寺の１つである。朝鮮出兵で全焼しているため，当時のものは三重石塔だけである。現存する建築物は1614年に再建されたもので，大雄殿をはじめ７棟の殿閣と２棟の楼閣，３つの門，11棟の庵などがある。

○　南山洞窯跡

現在は段々畑となっているが，白磁や粉青沙器が表採で確認できた。

５月25日（火）（対応：釜山博物館　羅東旭氏・釜山近代博物館　張慶俊氏）

○　薺浦（乃而浦）

塩浦と同じく三浦開港時期の交易港の１つである。寒村だが，すでに開発によって昔の面影は少ない。最盛期には約2,500人ほどが生活しており，北に位置する熊川邑城よりも人口が多かったといわれる。この港から主に朝鮮白磁や木綿が日本に運ばれたといわれる。

○　熊川邑城

熊川は古来釜山と鎮海方面を結ぶ交通路の要衝であり，当地域の政治・経済上の中心地にあたる。機張邑城同様の官衙跡で城壁跡が現存している。当時は幅５ｍもある城壁であったことが調査によって確認されている。

（熊川邑城）

○　金海竹島倭城

洛東江西岸の五峰山に所在する倭城で，文禄二年に鍋島直茂によって築城されたとされている。縄張りの踏査と表採資料の確認を行った。

○　大成洞古墳博物館

大成洞古墳（金官伽耶時代）に隣接した博物館で，施設内には同古墳出土遺物だけでなく，立体模型や映像資料，当時の伽耶人の生活様式を再現したジオラマなど，伽耶文化を視覚的に理解できるような展示内容となっている。博物館の前には古墳を散歩しながら見学できるような散歩道や遺構展示施設も設けられている。博物館内にあるほとんどの説明パネルや音声説明には日本語表記があり，案内所には日本語が堪能なボランティアも配置されていた。

○　国立金海博物館

当博物館は金官伽耶の建国説話が残る金海市旧地峰（亀旨峰）に隣接された博物館で，伽耶関係の遺物および伽挪の母体となった弁韓関係の遺物が展示されている。また伽耶の歴史は他の三国に比べて歴史記録が少なく，伽耶の実体の大部分は発掘調査における考古学的成果をもとに修復したものが多いという特徴があり，他の国立博物館と異なって考古学中心の専門博物館としての性格を有している。

５月26日（水）（対応：釜山博物館　白仙英氏・釜山近代博物館　張慶俊氏）

○　仏国寺

当寺院は仏国土を現世に再現することを目的として建設されたといわれ，創建の時期はさまざまな説があるが，528年に法興王の母の発願によって建設されたという記録が『仏国寺古今創記』に残っている。その後増改築を繰り返し約1000年繁栄するが，文禄・慶長の役で大半の建物が焼失している。視察時が釈迦生誕日であったため，多くの観光客で賑わっていた。

○　雁鴨池

674年にかつて王城のあった半月城（パヌォルソン）の東に建てられる。現在３つの建物が復元されている。

○　国立慶州博物館

本館は考古館と呼ばれ，さらに３つの展示コーナーに分けられている。考古館の正面入口の左手にあるのが先史・原三国室で，ここでは新石器・青銅器・初期鉄器・原三国時代の遺物を展示

している。入口正面にあるのは古墳室で，慶州市内に数多く存在する古墳から出土した遺物が展示されている。

5月27日（木）（対応：福泉洞博物館　董鎮淑氏・李賢珠氏）

○　福泉洞博物館

遺物整理室で無文土器をいくつか実見し，その後展示室を見学する。2階の第1展示室では弁韓や伽耶時代の出土品が展示されている。

○　釜山大学校

遺物整理室で勒島遺跡の遺物を実見する。弥生中期の土器が多く見受けられ，当大学院生に中期土器の様式について質問を受ける。展示室は新石器～朝鮮王朝時代までの遺物が展示されていた。

（釜山大学校）

5月28日（金）（対応：釜山博物館　柳順女氏・福泉洞博物館　李賢珠氏）

○　慶南大学校

馬山加浦洞遺跡出土の細形銅戈，銅剣，銅矛各1点ずつ実見する。祭祀遺構からの出土で共伴する土器は前5～6世紀であるが，遺構の性格を考慮するともう少し時期差にゆとりがあるかもしれない。韓半島における細形銅製品の多くは副葬品として出土することが多いため，珍しい例と思われる。

○　国立晋州博物館

晋州市内を流れる南江の川沿いに晋州城跡があり，その城壁の中に位置する。展示品としては文禄・慶長の役関係が中心で，文献資料の多さが目に付いた。

5月29日（土）：帰国準備

5月30日（日）

○　釜山市博物館訪問

○　帰　国：釜山港→博多港（見送：釜山近代博物館　張慶俊氏・釜山博物館　柳順女氏）

（2）釜山広域市文化財専門職員の受け入れ

①　受入期間　　平成15年6月7日（月）～6月17日（木）

②　釜山広域市職員　釜山広域市庁文化芸術課　文化財研究員　朴　在赫

　　釜山市立釜山近代博物館　学芸研究士　張　慶俊

③　調査研究概要　　長崎県内の史跡及び博物館施設等の視察，熊本市内の文化財視察

※金　聖美氏（長崎大学留学生）及び崔　充浄（長崎国際大学留学生）は通訳。

④　調査研究テーマ　「長崎県指定文化財の管理制度の調査研究」

⑤　調査研究内容

6月7日（月）（対応：原の辻遺跡調査事務所　林　隆広）

○　入　国：釜山港→比田勝港（対馬市上対馬町）

荒天により高速船が運航を中止したため釜山市職員2名は渡航できなかった。

6月8日（火）（対応：原の辻遺跡調査事務所　林　隆広）

○　入国・移動：釜山港→博多港→郷ノ浦港（壱岐市）

○　原の辻遺跡調査事務所…表敬訪問。意見交換とスケジュール調整を行い，展示館を視察する。

6月9日（水）（対応：壱岐市教育委員会　田中聡一・原の辻遺跡調査事務所　林　隆広）

○　壱岐市内視察（遣新羅使墓・鬼の窟古墳・双六古墳・勝本城・聖母宮・小弐公園）

○　移　動：壱岐空港→長崎空港

6月10日（木）（対応：長崎県教育庁学芸文化課　川口洋平・長崎大学生　金　聖美）

○　長崎県教育庁学芸文化課…表敬訪問。意見交換とスケジュール調整を行う。

○　長崎市内視察（オランダ坂・東山手洋館群・グラバー園）

長崎市内の幕末史跡とその活用事例を視察する。

6月11日（金）（対応：長崎県教育庁学芸文化課　川口洋平・長崎大学生　金　聖美）

○　出島和蘭商館跡

長崎市出島復元整備室の高田美由紀氏に対応を受ける。展示及び整備状況を視察する。

○　長崎原爆資料館…館内展示を視察する。

○　長崎市立博物館…館内展示を視察する。

6月14日（月）（対応：長崎県教育庁学芸文化課　川口洋平・長崎大学生　金　聖美）

○　島原城…整備状況を視察する。

○　雲仙復興記念館…館内展示を視察する。

○　原　城…南有馬町教育委員会の松本慎二氏に対応を受ける。発掘調査成果及び整備状況について意見交換を行う。

6月15日（火）（対応：長崎県教育庁学芸文化課　川口洋平・長崎国際大学生　崔　充浄）

○　ハウステンボス

長崎国際大学の立平進教授に対応を受け，史跡と観光のあり方について意見交換を行う。

○　佐世保市うつわ歴史館…館内展示を視察する。

○　移　動：佐世保→福岡

6月16日（水）（対応：原の辻遺跡調査事務所　林　隆広）

○　熊本城・水前寺公園…館内展示を視察する。

6月17日（木）（対応：原の辻遺跡調査事務所　林　隆広）

○　帰　国：博多港→釜山港

三　県内の調査動向・研究活動（文献一覧）

1　［調　査］

旧石器時代

島原半島の国見町では「石原遺跡」が調査された。石原遺跡は河川の自然堤防上に形成された遺跡で，縄文時代と旧石器時代の遺物包含層が礫層によって隔絶され，石器群および遺構が層を違えて検出されるなど良好な堆積状況を示している。また，ＡＴ火山灰層も検出されており，石器群の変遷について火山灰層を基準として検討することも可能である。旧石器時代の遺物としては，ＡＴ火山灰層下位より黒曜石製の小型のナイフ形石器と台形石器，上位より掻器，削器，使用痕のある剥片，石核などが出土し，遺構はピット・土坑・礫群が検出されている。平戸市の「入口遺跡」は，河岸段丘上に形成された遺跡である。昨年度は，Ｃ地点713地区に対する調査が行われ，７～13万年前と想定される土層より在地産のメノウを利用した台形状石器・舟形状石器・スクレイパー・石核・剥片・チップなどが出土している。石器が出土した土層を熱ルミネッセンス測定法で測定した結果，最も古く見積もって90,000±11,000年という年代が得られている。

縄文時代

島原半島の東側，有明海に面した深江町では「下末宝遺跡」と「上畦津遺跡」が調査された。下末宝遺跡では，円筒形条痕文土器・撚糸文土器・押型文土器など縄文早期の土器と若干の後期土器，各種石器類が出土している。遺構は不整形土坑３基と風倒木痕が検出された。上畦津遺跡では，縄文早期の円筒形条痕文土器・押型文土器と縄文晩期前半の黒色磨研土器，弥生早期の刻目突帯文土器（山ノ寺式土器）・組織痕土器のほか，石器類が出土している。五島列島の小値賀町に所在する「殿崎遺跡」は，小値賀島東南端の小さな入江の南側を海に面した標高７～９ｍの緩傾斜地に立地している。遺構は確認されなかったが，遺物包含層から縄文中期後葉～後期初頭の並木式土器・阿高式土器・南福寺式土器，後期前半の小池原下層式土器・鐘崎式土器・北久根山式土器と石器類が多数出土している。遺物は層位的に出土しなかったものの，人工層位によって縄文中期後葉～後期初頭の並木式土器・阿高式土器・南福寺式土器を主体とする下層と，後期前半の小池原下層式土器・鐘崎式土器・北久根山式土器を主体とする上層とに分けられ，各石器の特徴・石器組成の変化の分析，土器の胎土分析，古環境分析などが行われ，総合的な遺跡の理解が試みられている。その他，西有家町に所在する「野中遺跡」・「当田遺跡」と大村市の「黒丸遺跡」で，縄文晩期後半～弥生早期の黒川式土器・山ノ寺式土器と石器などが出土している。

弥生時代

壱岐市では，「カラカミ遺跡」と「原の辻遺跡」の調査が行われた。カラカミ遺跡は，標高88ｍの丘陵頂上部に位置する香良加美神社を中心とする丘陵周辺に形成された遺跡で，これまでに丘陵西側を南北に延びる環濠が確認されていたが，今回，丘陵の東側でも環濠の一部が確認されたことによって，遺跡周囲を環濠が取り囲んでいた可能性が高まった。環濠が取り囲んでいる範囲は，推定で東西

90 m，南北250 m である。環濠の断面は逆台形あるいはU字形を呈しており，上部を削平されていたために最も深い所でも40 cm が残存しているだけであった。出土土器は弥生中期～古墳初頭に及んでいる。原の辻遺跡は，壱岐島で最大の河川である幡鉾川下流域に広がる平野に舌状に延びた標高18 m の丘陵上に形成された環濠集落を中心とし，周辺の低地や微高地を含めて100 ha もの範囲に広がっており，史跡整備と内容把握を目的として継続的な発掘調査が行われている。原の辻遺跡調査事務所による丘陵部南半部（原地区）の調査では，最高地点の周辺よりも１段高くなった「祭儀場」の南端で確認されていた丘陵を横切る２条の併行する環濠に取り付く形で周溝状遺構が確認された。周溝状遺構とされるものは，環濠と関連しながら複雑に形を変え，周溝状の形態となるのは弥生後期終末の時期であるとされる。丘陵北半部（高元地区）では，丘陵北側の遺構集中区と「祭儀場」周辺における遺構集中区の間の未調査地区での遺構の確認と丘陵部における旧地形の復元を目的として南北200 m に渡るトレンチ調査を行い，多数の遺構と複数の文化層を確認するとともに，旧地形の復元を試みている。丘陵東側の低地部（石田高原地区）に対する調査は，北東低地部の調査が行われ，分岐・合流を繰り返し，あるいは途中で途切れる複数条の環濠が検出されている。また，これまでに行われた発掘調査成果を総括し，多岐に渡る項目について総合的に検討した報告書も刊行されている。一方，壱岐市教育委員会の発掘調査では，原ⅩⅥ区で弥生時代中期前半・後期後半～終末・古墳初頭の住居址・土坑が切り合った状態で検出され，高元Ⅱ区で弥生中期～古墳初頭にかけての掘立柱建物・独立柱遺構・土坑などが確認された。また，環濠集落の周辺微高地上に形成された墓域の一つである大原墓域に対する調査も行われ（石田大原355区），弥生中期初頭～中期前半の甕棺墓，土坑墓，土坑墓を主体部とする円形周溝墓，区画溝，ピットなどが検出された。土坑墓には小型広口壺や敲石・細形銅剣の剣先を副葬したものも認められる。墓坑を周溝で区画した墓は原の辻遺跡では初めて確認されたものであるが，周溝墓の存在とその周辺に小児甕棺が分布していることなどから，集団の中でも特別な存在の人々が埋葬されたものと想定されている。国見町に所在する「十園遺跡」は，弥生中期～古墳初頭にかけての環濠集落である。弥生中期の遺構としては断面Ｖ字で残存深度1.2 m 程度の環濠が約50 m と円形と方形の竪穴住居址が２基ずつ，弥生後期～古墳初頭の遺構は断面Ｖ字の環濠２条と方形と隅丸方形の竪穴住居址各１基が検出されている。出土した弥生中期の土器の中には，北部九州系の須玖式土器と中部九州系の黒髪式土器という２系統が認められ，当時の交流関係を知る上で注目される。

佐世保市所在の「門前遺跡」は，河川流域に形成された標高８ m の沖積微高地上に立地する集落址で，集落址とともに弥生早期～前期頃の木棺墓５基，弥生後期～古墳初期の箱式石棺墓７基・石蓋土坑墓２基・土坑墓２基・石囲墓１基・集積墓５基が調査された。弥生後期～古墳初期の墓の副葬品として納められた鉄剣・素環頭刀子・管玉・勾玉・ガラス玉の他，木製品・土器類・石器類・金属器類（鉄斧・銅鏃・銅鏡など）などの遺物が多数出土している。特に，木製品には魚・イモリ（?）などの透かし装飾を入れた板材・組み合せ式案（机）の部材・把手付きジョッキ形容器・祭儀器・鍬など，多様な器種が見られる。大村市の「富の原遺跡」は，河川下流域に広がる扇状地の末端部の海岸

に近い一帯に位置している。これまでの範囲確認調査によって，弥生中期後半～後期初頭の甕棺・石棺墓群と環濠が確認されていた。平成14年度の調査では，以前に確認されていた環濠の外側を巡る第２環濠と甕棺墓１基・小型の石棺墓６基が調査されている。諫早市の「風観岳遺跡」では，支石墓群などの調査が行われ，平成９年度より８次に渡って行われた調査が終了した。その他，長崎市の「深堀遺跡」で弥生中期末～後期初頭に比定できる甕棺墓，小値賀町に所在する「神ノ崎遺跡」で支石墓の調査が行われた。

古墳時代

国見町に所在する「上篠原遺跡」は，２本の河川に挟まれて段丘状に高まった標高38ｍの地点に立地している。ミカンの苗の植付け中や過去の調査において，陶質土器と共に多数の土師器が出土し，竪穴住居址が確認されている。今回の調査では土坑３基とピット18基が検出され，土坑中央最下層に焼土塊を伴うものも認められた。また，今回は陶質土器の出土は無かったものの，４世紀末～５世紀初頭に相当する多数の土師器と若干の須恵器が出土したことから，古墳時代中期の須恵器出現期前後に形成された遺跡であると考えられている。また，雲仙より延びた標高約25ｍの火山性扇状地上に形成された「龍王遺跡」では，全長30ｍ程度の前方後円墳が検出され，周溝内よりまとまった量の土師器・須恵器が出土するとともに，削平により床面のみ残った石室から鉄製品・勾玉などの副葬品が出土している。壱岐市では，「兵瀬古墳」の測量調査と報告書の刊行が行われ，以前に調査されていた「笹塚古墳」・「対馬塚古墳」の発掘調査報告書が刊行された。兵瀬古墳は，東に向かって緩やかにのびる丘陵の南側斜面に築かれた円墳である。高さ約13ｍ・直径53.5ｍの２段築成で，墳丘の周囲が溝状に掘り窪められて丘陵部から分離されている。主体部は３室構造の横穴式石室で，全長12.36ｍを測る。石室クリーニング中に７世紀前葉の須恵器が採集されている。笹塚古墳は，標高85ｍ程度の溶岩台地上に立地する円墳で，直径約70ｍの基壇上に直径約40ｍ・高さ10ｍ前後の墳丘が築かれた形である。副葬品としては，３室構造の横穴式石室の前室より杏葉・障泥金具・辻金具・雲珠・轡・鞍金具・鐙などの壮麗な金銅製馬具類が一括で出土している。その他に韓半島新羅土器を含む土器類，武器・農耕具などの鉄器類，ガラス玉などが出土し，出土須恵器の年代より６世紀末に初葬されて，７世紀末まで追葬が行われたものと考えられる。対馬塚古墳は，壱岐島において双六古墳に次ぐ規模の前方後円墳で，全長約65ｍである。２室構造の横穴式石室を主体部とし，６世紀後半～７世紀末にかけて埋葬が行われ，石室前方の傾斜面からは８世紀初頭に比定できる須恵器が出土していることから，埋葬行為終了後も一定期間祭祀が行われたものと見られる。また，前室側壁腰石と羨門袖石に幾何学状の線刻が確認されている。

古　代

前出の国見町の十園遺跡では，郡衙関連の遺構も確認されている。遺構は条里跡の地割方向と主軸を同じくする５棟の建物跡とわずかに軸のずれた建物１棟が確認され，周辺から石帯・墨書土器なども出土している。

中　世

諫早市の「沖城跡」は，現在海岸より2 kmの河川合流点に位置しているが，干拓以前には海へ突き出した岬の突端に位置していたことを，慶長10年に描かれた絵図から知ることができる。道路改良事業に伴う道路幅部分に対する調査において，杭列を伴う溝状遺構が調査され，中世末～近世初頭を主体とする陶磁器・土師質土器・瓦質土器・木製品・金属製品などが出土している。佐世保市の「針尾城跡」は，海に面した標高25 mの丘陵先端部に築かれた針尾氏の居城と考えられており，12・13世紀～16世紀後半までの貿易陶磁器を始め，国産陶器や瓦器・刀子などの鉄器・中国貨銭・茶臼などの茶の湯関係品などが出土しており，特に輸入陶磁器の比率が高い。城跡は東西約80 m，南北約60 mの範囲に広がる小規模城郭で，周囲を二重の空掘と土塁に護られ，中心部に東西約30 m，南北約25 mの平場を有している。平場からは多数の柱穴が検出され，様々な規模・形態で重複した建物址や鍛冶工房と想定される遺構などが確認されている。その他，入口部と関連すると考えられる石列や炭化米の詰まった柱穴，青磁皿埋納遺構なども確認されており，小規模ながら比較的当時の構造を良く残している。西彼町に所在する「膝行神貝塚」は，西彼杵半島北東部の大村湾に面した丘陵斜面に形成された遺跡で，中世～近世に至る貿易陶磁器，国産土器・陶磁器，石鍋などの滑石製品などが出土し，掘立柱遺構・土坑・ピット・柵列などの遺構が検出された。中国製の輸入陶磁器が多いことが特徴で，石鍋の製作・運搬と関連する遺跡の可能性も考えられたが，調査結果からは，そのことを積極的に裏付けることはできなかった。その他，中世城郭では北有馬町の「日野江城跡」，大村市の「三城城跡」，長崎市（旧外海町）の「神浦城跡」の報告があり，14世紀後半～17世紀前半に至る五輪塔・宝篋印塔・板碑が，調査された五島列島の小値賀町の「西林寺跡」，鷹島町の「鷹島海底遺跡」などの発掘調査報告書が刊行されている。また，小値賀町の前方湾と納島周辺でも海底遺跡の調査が行われ，中国製陶磁器や碇石などが出土している。

近　世

長崎市では，「長崎奉行所（立山役所）跡」・「岩原目付屋敷跡」・「炉粕町遺跡」の調査が行われ，下層面（17世紀初頭のキリシタン時代），中層面（17世紀前葉～中葉の井上屋敷時代，17世紀後葉～18世紀初頭の初期奉行所時代），上層面（18世紀初頭～末の奉行所・目付屋敷時代，18世紀末～19世紀後葉）の3面の遺構面に伴う様々な遺構と各種遺物が確認された。遺構の時期は，遺構面の在り方と層位・遺構・出土遺物から整理されており，絵図や史料との対比も試みられている。平戸市では，「平戸和蘭商館跡」の発掘調査が行われ，住居や倉庫の建物基礎や排水溝とともに，煉瓦や瓦などが出土した。その他，長崎市の「出島和蘭商館跡」において石垣や杭列などの部分的な調査が行われている。

（田　中）

2　［文献一覧］

○　報告書

No.	書　　名	シリーズ名	編著者名	発行機関
1	長崎県埋蔵文化財調査年報12	長崎県文化財調査報告書第182集	和田　政則	長崎県教育委員会
2	長崎奉行所（立山役所）跡・岩原目付屋敷跡・炉粕町遺跡 ―歴史文化博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（下）―	長崎県文化財調査報告書第183集	川口　洋平 柚木亜貴子 平田　賢明 櫻木　晋一 加藤　久雄 岡　　泰正	長崎県教育委員会
3	出島 ―一般国道499号線電線共同溝整備工事に伴う緊急調査報告書―	長崎県文化財調査報告書第184集	古門　雅高 川口　洋平	長崎県教育委員会
4	地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅱ	長崎県文化財調査報告書第185集	古門　雅高 山田　英明 柚木亜貴子	長崎県教育委員会
5	小野Ｆ遺跡 ―一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―	長崎県文化財調査報告書第186集	副島　和明 川畑　敏則 織田　健吾 下山　正一	長崎県教育委員会
6	原の辻遺跡 ―主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書②―	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第29集	林　　隆広	長崎県教育委員会
7	原の辻遺跡　総集編Ⅰ ―平成16年度までの調査成果―	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集	福田　一志 中尾　篤志	長崎県教育委員会
8	原の辻遺跡 ―原の辻遺跡調査研究事業調査報告書―	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集	中尾　篤志 溝上　貴稔	長崎県教育委員会
9	深掘遺跡 ―深堀純心幼稚園建設に先立つ埋蔵文化財範囲確認調査報告書―	―	櫻庭　由美 宮下　雅史	長崎市教育委員会

No.	書　　名	シリーズ名	編著者名	発行機関
10	炉粕町遺跡 ―長崎歴史文化博物館建設に係る道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	―	立石　明	長崎市教育委員会
11	神浦城跡発掘調査報告書	―	中村　和正	長崎市教育委員会
12	針尾城跡 ―平成16年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書―	―	川内野　篤	佐世保市教育委員会
13	沖城跡Ⅱ ―市道井田井原線道路改良工事に伴う発掘調査報告書―	諫早市文化財調査報告書第18集	川瀬　雄一	諫早市教育委員会
14	小野堀口遺跡 ―県営かんがい排水事業(排水対策特別型)松崎東に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	諫早市文化財調査報告書第17集	秀島　貞康 園村　維敏 長尾　聡子	諫早市教育委員会
15	黒丸遺跡ほか発掘調査概報Vol. 5	大村市文化財調査報告書第28集	大野　安生 松川　憲毅 松尾　尚哉	大村市教育委員会
16	市内遺跡確認調査報告書Ⅳ	平戸市の文化財52	塩塚　浩一	平戸市教育委員会
17	史跡平戸和蘭商館跡の発掘調査Ⅸ	平戸市の文化財53	萩原　博文 加藤　有重 塩塚　浩一	平戸市教育委員会
18	2004対馬市文化財共同調査	対馬市文化財共同調査報告書	宮脇　好和	対馬市教育委員会
19	特別史跡　原の辻遺跡 ―原の辻遺跡記念物保存修理に伴う発掘調査―原ⅩⅥ区・高元Ⅱ区―	壱岐市文化財調査報告書第１集	松見　裕二	壱岐市教育委員会
20	特別史跡　原の辻遺跡 ―原の辻遺跡記念物保存修理に伴う発掘調査―石田大原355区―	壱岐市文化財調査報告書第２集	松見　裕二	壱岐市教育委員会
21	原の辻遺跡 ―市内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査―原の久保Ａ地点・原の久保Ｂ地点―	壱岐市文化財調査報告書第３集	松見　裕二	壱岐市教育委員会

No.	書　　名	シリーズ名	編著者名	発行機関
22	兵瀬古墳 ―市内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査―	壱岐市文化財調査報告書第4集	山口　優	壱岐市教育委員会
23	笹塚古墳 ―市内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査―	壱岐市文化財調査報告書第5集	田中　聡一	壱岐市教育委員会
24	対馬塚古墳 ―市内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査―	壱岐市文化財調査報告書第6集	田中　聡一	壱岐市教育委員会
25	膝行神貝塚	西彼町文化財調査報告書第2集	本田　秀樹	西海町教育委員会
26	十園遺跡Ⅱ ―国見町多比良地区町営圃場整備事業に伴う発掘調査概報―	国見町文化財調査報告書（概報）第5集	竹中　哲朗 辻田　直人	国見町教育委員会
27	石原遺跡Ⅱ ―国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報―	国見町文化財調査報告書（概報）第6集	辻田　直人	国見町教育委員会
28	下末宝遺跡・上畦津遺跡	深江町文化財調査報告書第1集	本多　和典 大河　憲二	深江町教育委員会
29	野中遺跡・当田遺跡 ―西有家町見岳地区県営畑地帯総合整備事業における範囲確認調査―	西有家町文化財調査報告書第2集	栃原　嘉明	西有家町教育委員会
30	日野江城跡 ―史跡 日野江城跡環境整備計画に伴う発掘調査概要報告書―	北有馬町文化財調査報告書第5集	木村　岳士	北有馬町教育委員会
31	上木場遺跡・国崎半島遺跡 ―農村振興総合整備統合補助事業に伴う範囲確認調査報告書―	南串山町文化財調査報告書第7集	遠部　慎 角緑　進 加藤　久雄	南串山町教育委員会
32	鬼塚遺跡 ―県営農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化発掘調査報告書―	南串山町文化財調査報告書第8集	遠部　慎	南串山町教育委員会
33	鷹島海底遺跡XI ―鷹島海底遺跡内容確認発掘調査報告書5―	鷹島町文化財調査報告書第10集	松尾　昭子	鷹島町教育委員会

○ 論　文

1．荻　幸二「旧石器時代西北九州地方の大形尖頭器の受給関係に関する一考察」『Stone Sources』4 石器原産地研究会

2．川口洋平「中世後期の対馬・壱岐・松浦」『中世西日本の流通と交通』，高志書院

3．川口洋平「中世の長崎 ― 開港前後の町・人・モノ ―」『中世都市研究』10，新人物往来社

4．川口洋平「長崎出土の茶入・香合」『研究紀要』第13号，野村美術館

5．川口洋平・山田英明「長崎県」『中世墓資料集成』九州・沖縄編(2)，中世墓資料集成研究会

6．川道　寛「日本列島最西端の細石器文化」『地域と文化の考古学』1，明治大学考古学研究室

7．川道　寛「新石器時代後半の韓半島と北部九州」『海外との交わり・平戸 ― 旧石器時代から現代まで』海外交流史研究会

8．川道　寛「第二章歴史，第一節旧石器時代・第二節縄文時代・第三節弥生時代・第四節古墳時代の小長井町・第五節長戸鬼塚古墳の調査と成果」『新小長井町史』，小長井町

9．佐藤勇次・高橋愼二「遺跡見学旅行記 ― 星鹿半島の旧石器」『九州旧石器』8，九州旧石器文化研究会

10．塩塚浩一「長崎県の動向」『九州旧石器』8，九州旧石器文化研究会

11．下川達彌「九州旧石器研究の黎明期 ― 西北九州を中心として ―」『九州旧石器』8，九州旧石器文化研究会

12．杉原敏之「列島西端における角錐状石器の出現」『地域と文化の考古学』1，明治大学考古学研究室

13．杉原敏之「ＡＴ降灰後の西九州 ― 尖頭器石器群の出現と展開 ―」『九州旧石器』8，九州旧石器文化研究会

14．橘　昌信「西九州産黒曜石の流通と遊動領域 ― 九州島における後期旧石器時代遺跡群集中分布域の石材利用 ―」『地域と文化の考古学』1，明治大学考古学研究室

15．塚原　博「中世五島の港と流通 ― 五島列島中世期の様相 ―」『中世都市研究会』第10号，新人物往来社

16．辻田直人「長崎における調査成果の現状と課題」『九州旧石器』8，九州旧石器文化研究会

17．中尾篤志「弥生時代における植物利用 ― 原の辻遺跡におけるケーススタディー ―」『日・韓交流の考古学』，九州考古学会・嶺南考古学会第6回合同考古学会

18．萩原博文「ナイフ形石器文化後半期の集団領域」『考古学研究』第51巻第2号，考古学研究会

19．萩原博文「台形石器類の出現過程」『山下秀樹氏追悼考古論集』，山下秀樹氏追悼考古論集

20．萩原博文「九州最古の旧石器」『九州旧石器』8，九州旧石器文化研究会

21．萩原博文「最初に朝鮮海峡を渡った人々 ― 平戸入口遺跡の石器群を中心に ―」『海外との交わり・平戸 ― 旧石器時代から現代まで』，海外交流史研究会

22．萩原博文・塩塚浩一「速報：日本最古級の旧石器 ― 入口Ｃ地点平成16年度調査新資料 ―」『平戸市史研究』第10号

23．古門雅高「長崎県の縄文時代装身具 ― 石製装身具を中心に ―」『九州の縄文時代装身具』，第15回九州縄文研究会沖縄大会，九州縄文研究会
24．松尾尚哉「長崎県本土部の古式土師器」『福岡大学考古論集』，小田富士雄先生退職記念

○　その他

1．九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室『倭人伝の道と北部九州の古代文化』九州大学所蔵考古資料展図録　上原利恵「1浅生湾の調査」，関川英樹「5串山ミルメ浦遺跡」，東本宗一郎「3原の辻遺跡」，降矢哲男「2吉田遺跡」，丸尾弘介「4カラカミ遺跡」
2．佐賀県立名護屋城博物館『対馬 ― 日韓交流の架け橋 ―』，平成16年度常設特別展
3．副島和明「門前遺跡」『発掘された日本列島2005』，朝日新聞社
4．長崎県教育委員会『平成16年度原の辻大学講座　Dr.ハルの原の辻をもっと知ろう塾講演記録誌』稲田孝司「壱岐にナウマンゾウがいた頃」，木下尚子「弥生人のおしゃれ関係」，甲元眞之「東アジアと一支国の漁撈」徐光輝「中国から見た原の辻遺跡」，武末純一「一支国人は何処へ行った？」
5．福田一志「42　長崎県」『日本考古学年報56』，日本考古学協会
6．川道　寛『日本考古学年報55』（日本考古学協会）

四　長崎県教育委員会発行調査報告書一覧

集	報　告　書　名	発行年
1	長崎県遺跡地名表（埋蔵文化財包蔵地一覧）	1962
2	五島遺跡調査報告	1964
3	民俗資料調査報告書	
4	福井洞穴調査報告（図録編）	1966
5	深堀遺跡	
6	男女群島特別調査報告	1968
7	宮下遺跡調査報告（図録編）	1968
8	対馬 ― 豊玉村佐保シゲノダン・唐崎の青銅器を出土した遺跡の調査報告	1969
9	宮下遺跡調査報告（解説編）	
10	堂崎遺跡調査報告書（長崎県長与町所在）	1970
11	有明海沿岸地区の民俗	1972
12	長崎県の民家（前編・後編）	1972
13	対馬西岸阿連・志多留の民俗	1972
14	里田原遺跡（図録）	
15	下五島貝津・大串の民俗（本文編・図録編）	1974
16	対馬の文化財	
17	対馬 ― 浅茅湾とその周辺の考古学調査 ―	1974
18	里田原遺跡（略報Ⅱ）	1974
19	壱岐の文化財	
20	対馬の遺跡	1975
21	里田原遺跡	1975
22	下五島の文化財	
23	長崎県民俗地図	1976
24	諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集（図録編）	1975
25	里田原遺跡	1976
26	原の辻遺跡	1976
27	西彼杵半島猪垣分布調査概観	1977
28	平戸市野子地域の民俗・福島町土谷の民俗（上・下）	1977
29	長崎県のカトリック教会	1977
30	旧島原藩薬園跡環境整備報告	1977
31	原の辻遺跡Ⅱ ― 長崎県壱岐郡所在の弥生遺跡 ―	1977
32	里田原遺跡	1977
33	金石城跡緊急発掘調査報告書	1977
34	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅰ）採譜篇・別冊	

集	報　告　書　名	発行年
35	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ	1978
36	世知原町開作免の民俗	1978
37	原の辻遺跡Ⅲ ― 長崎県壱岐郡所在の弥生遺跡 ―	1978
38	里田原遺跡	1978
39	日蘭関係資料	1979
40	平戸・上五島地区の文化財	1979
40-2	平戸・上五島地区の文化財（美術工芸品の部）	1979
41	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅱ）採譜篇	1979
42	長崎県の海女（海士）	1979
43	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅲ）	1979
44	松浦市とその周辺地区の文化財	1979
45	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ	1979
46	大村湾の漁労習俗	1980
47	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅳ）	1980
48	キリシタン関係資料	1980
49	佐世保市とその周辺地区の文化財	1979
50	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅲ	1980
51	串島遺跡	1980
52	ケイマンゴー遺跡	1980
52-a	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅴ）	1981
53	諫早・大村・北高来郡の文化財	1981
54	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ	1981
55	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅳ	1981
56	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ	1982
57	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅴ	1982
58	堂崎遺跡 ― 長崎県有家町所在の海中干潟遺跡 ―	1982
59	島原・南高の文化財	1982
60	針尾人崎遺跡 ― 佐世保市針尾中町所在 ―	1982
61	長崎唐寺関係所蔵品目録	1982
62	長崎・西彼の文化財	1983
63	橘湾の漁労習俗	1983
64	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ	1983
65	諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ	1983
66	長崎県文化財調査報告書埋蔵文化財Ⅵ	1983

集	報　告　書　名	発行年
67	長崎県文化財調査報告書埋蔵文化財Ⅶ	1984
68	今福遺跡Ⅰ　県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　第一冊	1984
69	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅳ	1984
70	長崎県の農具調査（前編）	1985
71	名切遺跡	1985
72	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅴ	1985
73	西ノ角遺跡	1985
74	諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ	1985
75	長崎県埋蔵文化財集報Ⅷ	1985
76	楼楷田遺跡　松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書	1985
77	今福遺跡Ⅱ　県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　第二冊	1985
78	百花台遺跡	1985
79	長崎の近世社寺築　近世社寺建設緊急調査報告書	1986
80	長崎県の農具調査（後編）	1986
81	上原遺跡	1986
82	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅸ	1986
83	殿崎遺跡	1986
84	今福遺跡Ⅲ　県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　第三冊	1986
85	諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告Ⅲ	1986
86	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅹ	1986
87	長崎県遺跡地図	1987
88	長崎県の民謡	1987
89	温泉岳　保存管理計画策定書	1988
90	中道壇遺跡	1988
91	長崎県埋蔵文化財調査報告書ⅩⅠ	1988
92	百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1988
93	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅵ	1989
94	長崎県埋蔵文化財調査集報ⅩⅡ	1989
95	魚洗川Ｂ遺跡 ― 全国植樹祭会場造成工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ―	1990
96	長崎県の諸職調査	1990
97	長崎県埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ	1990
98	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅶ	1990
99	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ	1991
100	礫石原遺跡 ― 県道愛野～島原線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ―	1991

集	報　告　書　名	発行年
101	長崎県埋蔵文化財調査報告書ＸⅣ	1991
102	対馬天然記念物緊急調査報告書	1991
103	長崎県天然記念物実態調査報告書 ― 対馬を除く ―	1991
104	長崎県埋蔵文化財調査集報ＸＶ	1992
105	上大垣遺跡	1992
106	県内古墳詳細分布調査報告書	1992
107	大陸渡来文物緊急調査報告	1992
108	長崎県埋蔵文化財調査集報ＸⅥ	1993
109	県内重要遺跡範囲確認調査報告書	1993
110	長崎県遺跡地図 ― 長崎市・諫早市・大村市・西彼杵郡・北高来郡地区 ―	1994
111	長崎県遺跡地図 ― 島原市・南高来郡地区 ―	1994
112	長崎県遺跡地図 ― 壱岐地区 ―	1994
113	長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅰ	1994
114	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ	1994
115	中木場遺跡 ― 水無川第３遊砂地造成工事に伴う発掘調査報告書 ―	1994
116	県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1994
117	長崎県遺跡地図 ― 福江市・南松浦郡地区 ―	1995
118	長崎県遺跡地図 ― 対馬地区 ―	1995
119	長崎県遺跡地図 ― 佐世保市・平戸市・松浦市・北松浦郡・東彼杵郡地区 ―	1995
120	長崎県の民俗芸能 ― 長崎県民俗芸能緊急調査報告書 ―	1995
121	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅲ	1995
122	長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅱ	1995
123	万才町遺跡　長崎県庁新別館建替えに伴う発掘調査報告書	1995
124	原の辻遺跡	1995
125	長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅲ	1996
126	伊木力遺跡Ⅰ	1996
127	黒丸遺跡Ⅰ ― 都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書 ―	1996
128	中木場遺跡Ⅱ ― 水無川４号遊砂地造成工事に伴う工事立会調査 ―	1996
129	中木場遺跡Ⅲ ― 水無川１号ダム建設工事に伴う緊急発掘調査 ―	1996
130	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅳ	1996
131	長崎奉行所関係文書調査報告書	1997
132	黒丸遺跡Ⅱ	1997
133	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅴ	1997
134	伊木力遺跡Ⅱ	1997

集	報　告　書　名	発行年
135	長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅳ	1997
136	稗田原遺跡Ⅰ	1997
137	広平遺跡	1997
138	桟原城遺跡	1997
139	石田城跡	1997
140	長崎県の近代化遺産 ― 長崎県近代化遺産総合調査報告書 ―	1998
141	大浜遺跡	1998
142	蒲河遺跡	1998
143	沖城跡	1998
144	桜町遺跡	1998
145	稗田原遺跡Ⅱ	1998
146	長崎奉行所（立山役所）跡	1998
147	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅰ	1998
148	長崎県埋蔵文化財調査年報 5	1998
149	馬乗石遺跡	1998
150	長崎県埋蔵文化財調査年報 6	1999
151	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅱ	1999
152	稗田原遺跡Ⅲ	1999
153	長崎県のカクレキリシタン ― 長崎県のカクレキリシタン習俗調査事業報告書 ―	1999
154	長崎街道 ― 長崎県歴史の道（長崎街道）調査事業報告書 ―	2000
155	長崎県埋蔵文化財調査年報 7	2000
156	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅲ	2000
157	稗田原遺跡Ⅳ	2000
158	長崎県埋蔵文化財調査年報 8	2001
159	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅳ	2001
160	平野遺跡	2001
161	稗田原遺跡Ⅴ	2001
162	栄町遺跡	2001
163	石田城跡Ⅱ	2001
164	長崎県埋蔵文化財調査年報 9	2002
165	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅴ	2002
166	森岳城跡	2002
167	玖島城跡	2002
168	千里ヶ浜遺跡	2002

集	報　　告　　書　　名	発行年
169	歴史の道整備活用推進事業　長崎街道整備活用計画報告書	2002
170	長崎県の祭り・行事調査報告書	2002
171	長崎県埋蔵文化財調査年報10	2003
172	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅵ	2003
173	森岳城跡Ⅱ	2003
174	供養川遺跡	2003
175	長崎県埋蔵文化財調査年報11	2004
176	地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅰ	2004
177	長崎奉行所(立山役所)跡 ― 歴史文化博物館(仮称)建設に伴う発掘調査報告書 ―	2004
178	今屋敷家老屋敷跡	2004
179	下木場遺跡	2004
180	日蘭関係資料Ⅱ～県外編～	2004
181	長崎県の近代和風建築 ― 長崎県近代和風建築総合調査報告書 ―	2004
182	長崎県埋蔵文化財調査年報12	2005
183	長崎奉行所（立山役所）跡　岩原目付屋敷跡　炉粕町遺跡 ― 歴史文化博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（下）―	2005
184	出　島 ― 一般国道499号線電線共同溝整備工事に伴う緊急調査報告書 ―	2005
185	地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅱ	2005
186	小野Ｆ遺跡 ― 一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―	2005

五　事業別発掘調査届出件数及び県市町村別埋蔵文化財職員数の推移

○　事業別発掘調査届出件数の推移

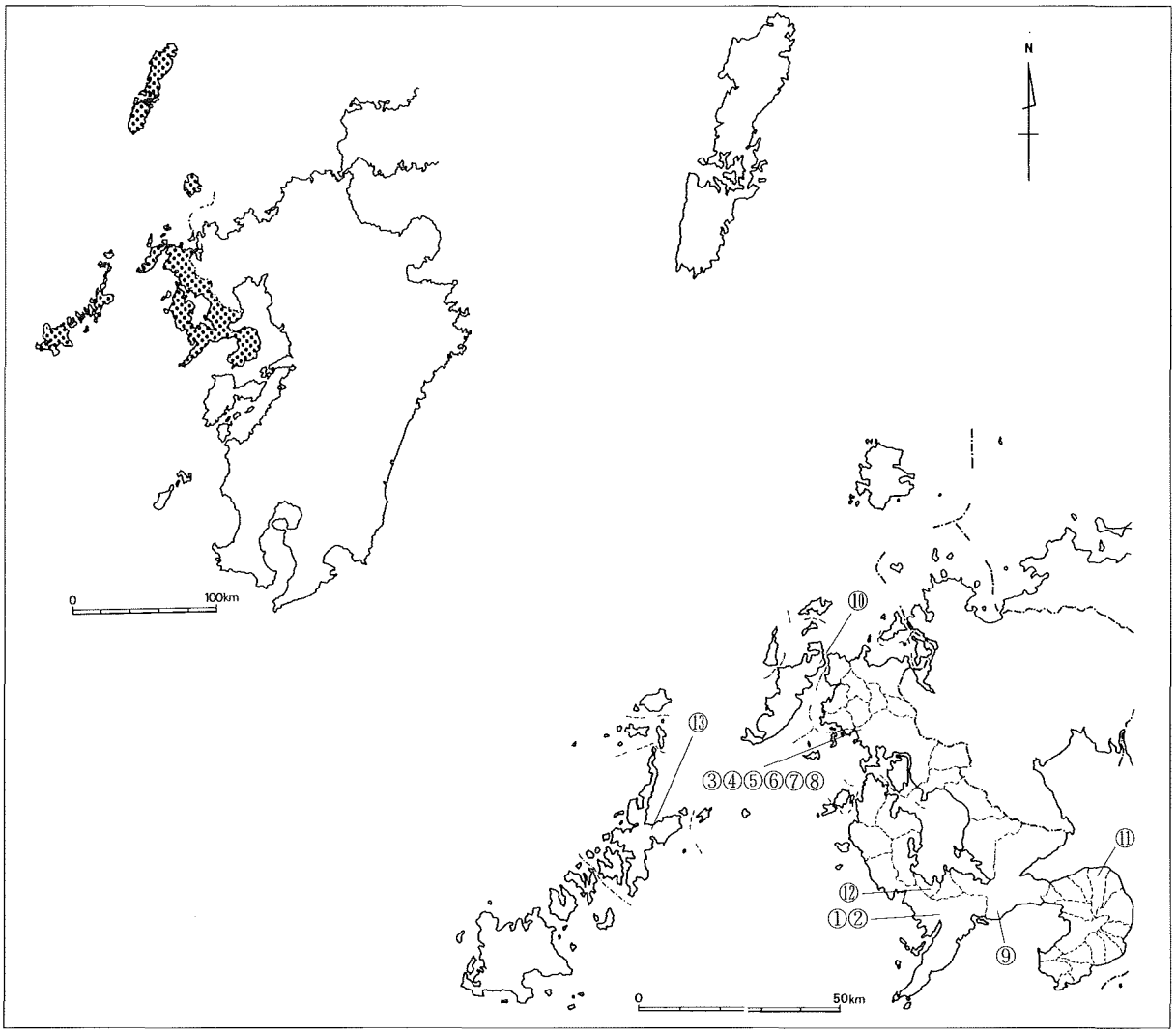
		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年
緊急調査	道路	15	8	7	6	10	12
	河川	2	1	0	0	1	1
	学校	4	1	1	1	1	0
	住宅・宅地造成	28	13	3	3	5	4
	工場	1	3	0	0	0	0
	店舗等	0	5	0	0	0	1
	その他建物	5	13	2	4	1	4
	土地区画整理	0	0	0	0	0	0
	公園造成	2	1	0	1	1	0
	観光開発	1	1	0	0	0	0
	ガス等	0	2	3	2	2	2
	農業関係	34	21	9	4	6	9
	その他開発	14	8	2	2	3	1
	自然崩壊	0	0	0	0	0	1
	遺跡地図作製等	2	0	0	0	0	0
	保存目的	0	6	13	14	18	24
	遺跡整備	1	0	2	2	0	2
学術・研究		6	7	8	6	2	3
合計		115	90	50	45	50	64

○　県市町村別埋蔵文化財担当職員数の推移

（　）は嘱託数

	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
県	16（5）	17（7）	16（5）	17（5）	18（5）	22（13）
市町村	36（6）	42（4）	43（5）	47（10）	43（12）	42（10）

Ⅱ　各遺跡の調査概要



平成16年度長崎県内発掘調査箇所

遺跡名		所在地	遺跡名		所在地
①	長崎奉行所跡	長崎市	②	出島（和蘭商館）跡	長崎市
③	門前遺跡	佐世保市	④	竹辺C遺跡	佐世保市
⑤	竹辺D遺跡	佐世保市	⑥	竹辺D遺跡	佐世保市
⑦	竹辺D遺跡	佐世保市	⑧	武辺城跡	佐世保市
⑨	開遺跡	諫早市	⑩	獅子第1遺跡	平戸市
⑪	魚洗川B遺跡	雲仙市	⑫	久留里遺跡	時津町
⑬	浜郷遺跡	新上五島町			

①長崎奉行所（立山役所）跡

所 在 地	長崎市立山１丁目	調査主体	長崎県教育委員会
調査原因	長崎歴史文化博物館建設	調査面積	180 m²
調査期間	平成16年11月２日～平成16年12月３日	調査区分	本調査
報 告 書	平成17年３月刊行	処　　置	調査後工事，一部保存

立　地

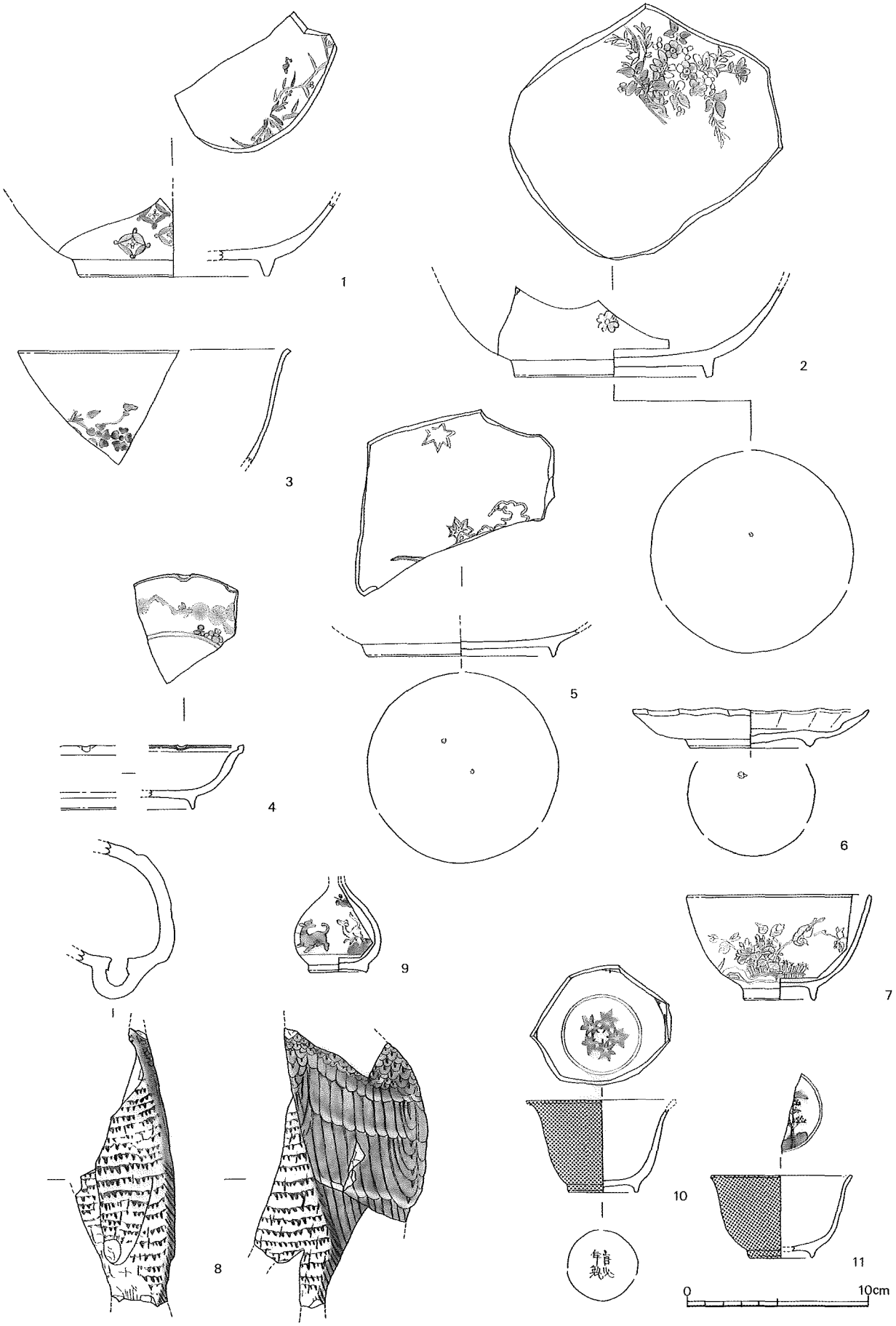
本遺跡は，長崎市街の北東部に位置する立山にある。付近は標高336 m の金比羅山の山裾にあたり，延宝元年（1673）長崎奉行所立山役所が置かれた。標高は20～30 m で，明治以降も学校や官庁など拠点的な場所として使用された。昭和40年には長崎県立美術博物館が開館し，平成14年まで文化発信の中心的な場として機能していた。

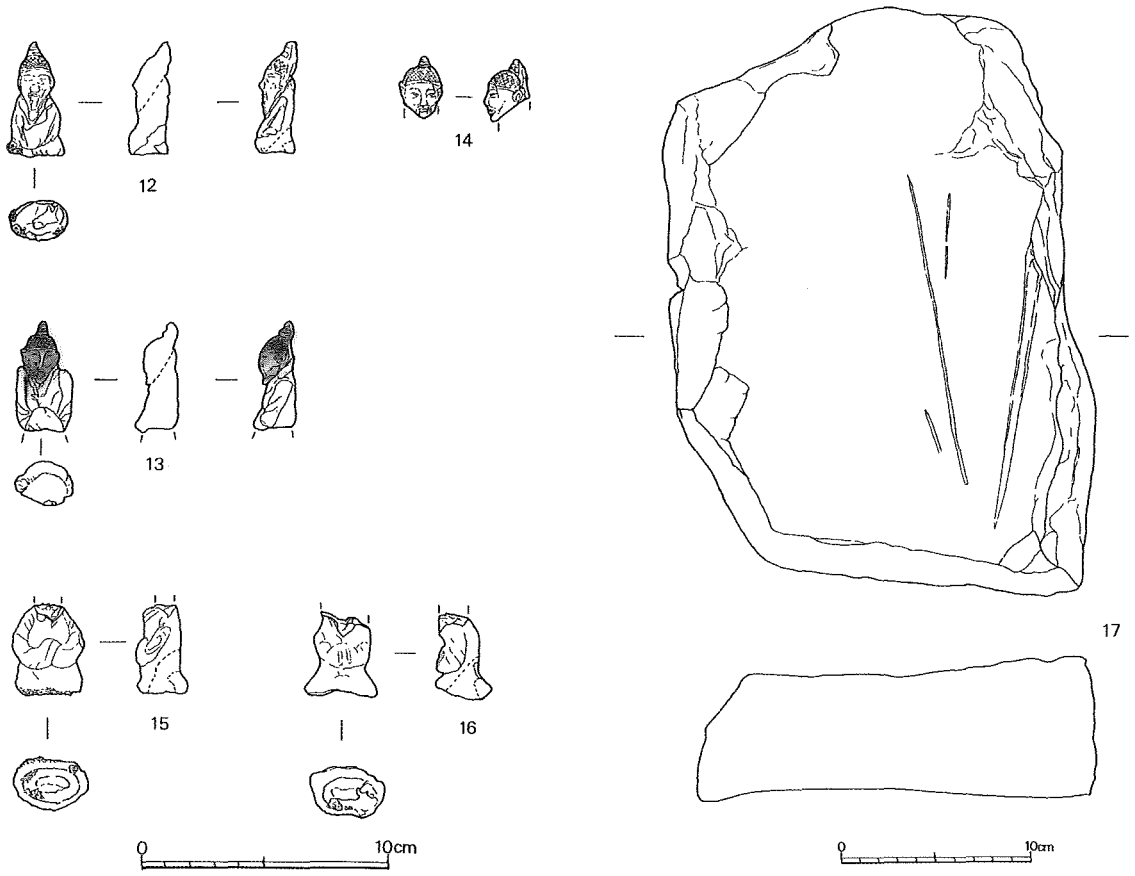
長崎奉行所跡位置図［長崎東北部・東南部］（S＝１／25,000）

調　査

調査は，平成14年度から行った長崎歴史文化博物館建設に伴う発掘調査の一環として，長崎奉行所正門付近について行ったものである。報告書刊行済みであるので，報告漏れの重要遺物についてふれたい。追加報告する資料には，隣接する岩原目付屋敷跡および炉粕町遺跡の資料を含むが，本来同一の遺跡であり，いずれも1710年代の奉行所の造成と改造に伴って埋没したものである。なお柿右衛門様式については，柿右衛門窯で焼かれたと考えられるものと有田周辺で焼かれた類似のものをそれぞれ狭義と広義の柿右衛門様式として区別している（大橋康二，鈴田由紀夫氏のご教示）。

１～７は，岩原目付屋敷跡から出土した柿右衛門様式の肥前色絵である。１～５は狭義，６～７は広義の柿右衛門様式である。１はＳＢ４のピット８から，２はＶ層から出土した鉢の底部である。３はＶ層から出土した口縁部であるが胴部付近の厚さが１・２とほぼ同じであることから，直接接合はしないものの，同種であると判断される。口縁部は端反りになっており，鉄釉はかかっていない。残存する色絵は，青色の枝葉と赤色の花をみることができる。なお，２の高台内には小さなハリササエの痕が中央に１ヶ所ある。畳付けは露胎となっている。４はＶ層から出土した輪花の深皿で口縁部に鉄を塗っている。内面に梅を描いているが色が残っておらず青い枝がみえ，見込みには赤で圏線と花を描く。畳付けは露胎である。５はＶ層から出土した皿で，見込みに陽刻で草花文を施す。色絵は残っていない。高台内に小さなハリササエ痕が２ヶ所残り，畳付けは露胎となっている。６はＳＢ４の基壇土から出土した輪花皿である。釉は光沢があり色絵はなく白磁となっている。口縁部は折れて直口となっており鉄を塗る。高台内にはハリササエが１ヶ所残り，畳付けは露胎となっている。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
0
10cm



7はⅤ層から出土した碗で色絵はほとんど剥落しているが，わずかに赤が残り，花鳥が描かれている。口縁部に鉄は塗らず，畳付けは露胎となっている。8は炉粕町遺跡のＳＤ１から出土した鷹の置物である。羽と胴部が残り，色絵ではなく素地に褐釉をかけて羽毛や羽を表現している。9は岩原目付屋敷跡から出土した色絵染付小壺で，唐子と思われる童子二人と犬が２匹描かれる。それぞれ片方が染付，もう片方は黄色の色絵で対を成している。ほかに染付で梅，赤絵で笹文が描かれている。高台は円盤状で露胎となっている。10は岩原目付屋敷跡のⅤ層から出土した染付外褐釉の小鉢である。高台内は染付で「宣（明カ）年製」と書き，畳付けは露胎。見込みは型紙摺りで紅葉を描く。肥前産で11を模したものか。11は同じⅤ層から出土した中国産の青花外褐釉小鉢いわゆるバタヴィアン・ウェアである。見込みに山水文を描き，高台内は透明釉で畳付けは露胎。10に較べて器壁が薄い。12～16は肥前産の唐人形灯芯押で1630～40年代とされている。12のみ炉粕町遺跡ＳＤ１，そのほかは岩原目付屋敷跡のⅤ層出土である。12・13は頭部に鉄を塗り胴部は透明釉がかかり白磁となっている。下部には後ろから斜めに孔を穿ち，接地面まで露胎となる。下部は焼成時に砂が付着している。14は同タイプの頭部である。15・16は頭部を欠損しているが、胴部は青白磁風の釉がかかる。やはり背面から下部に芯通しの孔があり，外面下部には使用された汚れが付着している。17は砂岩製の石板で，長崎奉行所正門石畳横の玉砂利下から出土した。表面に人為的に溝が彫られている。モチーフは不明であるが，付近の石造物の多くは安山岩であるのと対称的である。キリシタン墓碑の可能性もあることから追加報告することとした。

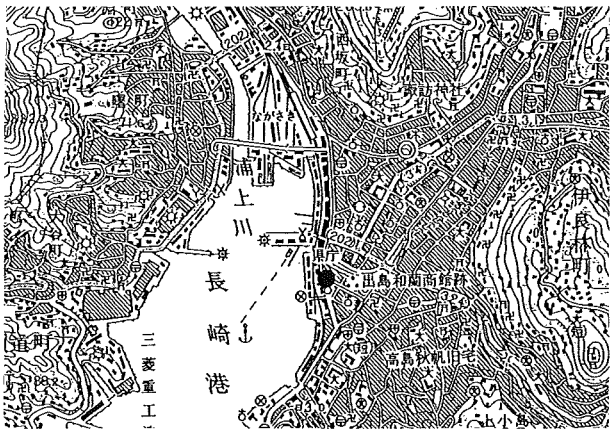
【調査担当：川口・柚木】〔実測・製図協力：平田賢明・浜崎美加・野島愛子〕（文責：川口）

②出島（和蘭商館）跡

所 在 地	長崎市出島町	調査主体	長崎県教育委員会
調査原因	共同溝整備	調査面積	400 m²
調査期間	平成16年８月２日～平成16年10月16日	調査区分	本調査
報 告 書	平成17年３月刊行	処　　置	調査後工事

立　地

出島のある長崎港は，長崎市西部の西彼杵半島と長崎半島に挟まれ南北に細長く湾入している。出島は，この長崎港に突き出た細長い岬の突端の沖に築造された人工島で，岬の東側を流れる中島川の河口付近に位置している。北側の岬の突端上には長崎奉行所西役所（現長崎県庁）があり，厳重な監視が行われていた。



出島和蘭商館跡位置図［長崎東北部・東南部］
（S＝1／25,000）

調　査

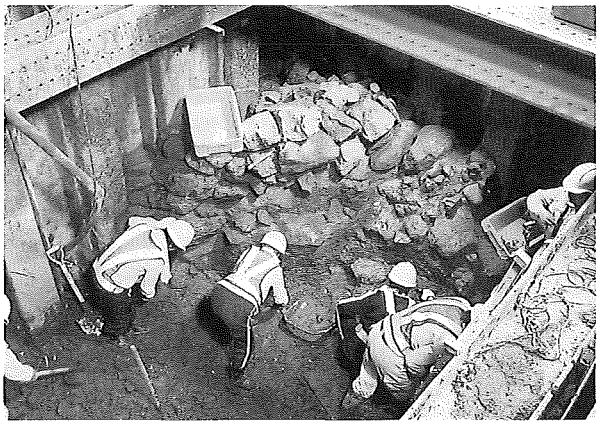
出島は寛永13年（1634）に完成し，当初ポルトガル人を収容していたが，ポルトガル人追放後，寛永18年（1641）には平戸からオランダ商館が移転し，以後まで日蘭貿易の拠点として続いた。安政の開国（1859）後は外国人居留地となり，周囲は段階的に埋め立て（築足し）が行われた。

今回の調査は，電線共同溝工事がこの築足し部分に係ることから行った。結果，文久元年（1861）と慶応３年（1867）の築足しの際の石垣が確認されたほか，元治元年（1864）の築足しに存在したカスタムハウスに関連するとみられる石積み遺構が確認された。また，築足しの土層として敷粗朶や杭も確認された。築足し土からは，国産，琉球産のほか多くの西洋陶器，クレーパイプが出土した。

まとめ

絵図面や文献から知られた幕末の築足し遺構が実際に発掘によって確認された意義は大きい。また，敷粗朶など当時の土木技術が具体的に明らかになったことも大きな成果であると言える。さらに廃棄下限のわかる遺物については，分類・編年上で貴重な資料となるであろう。

【調査担当：古門・川口】（文責：川口）



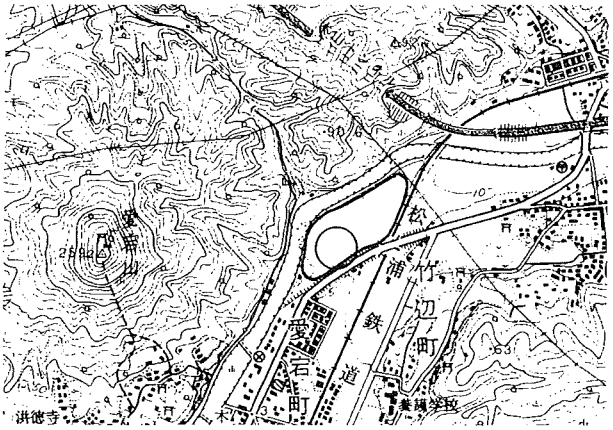
調査風景

③門前遺跡

所 在 地	佐世保市愛宕町・中里町	調査主体	長崎県教育委員会
調査原因	一般国道497号建設工事	調査面積	18,450 m²
調査期間	平成16年6月1日～平成17年3月18日	調査区分	本調査
報 告 書	平成17年度・平成20年度刊行予定	処　　置	調査後工事

立　地

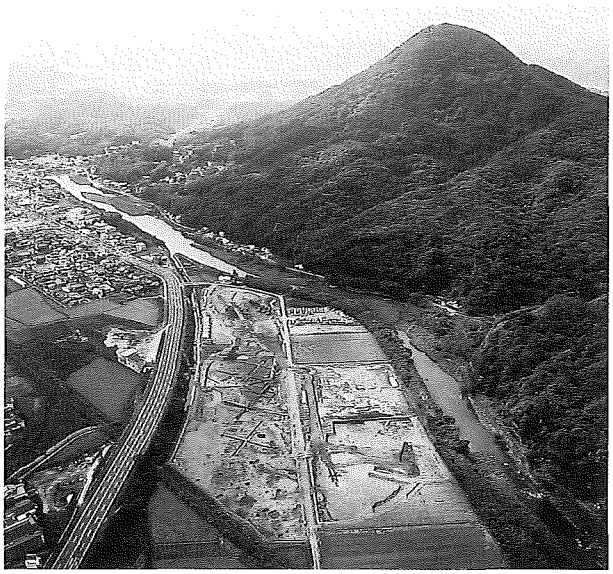
当該遺跡は，佐世保市北西部を流れる相浦川下流域の標高約8mの河岸段丘上に立地する。この河岸段丘は，遺跡東方に位置する将冠岳の裾野に形成されている。相浦川は，ここで大きく湾曲して河口に至る。現在河口までの距離は約2.5kmである。また，河口西側の大潟町付近では，水銀が採掘された時代もある。遺跡北西側の対岸には，佐世保砂岩の露頭が見られる。西側には円錐形の独立峰，標高約259mの愛宕山が位置する。この山は遠く五島沖からも確認される。前近代の有視界航行においては，港津の成立条件としてランドマーク（的山）が必要である。当該遺跡は，古くから海上交易の重要拠点（港市）であったと考えられるが、ランドマークとしての愛宕山の存在が，遺跡の成立と存続にとって最大の要因であったと推測される。

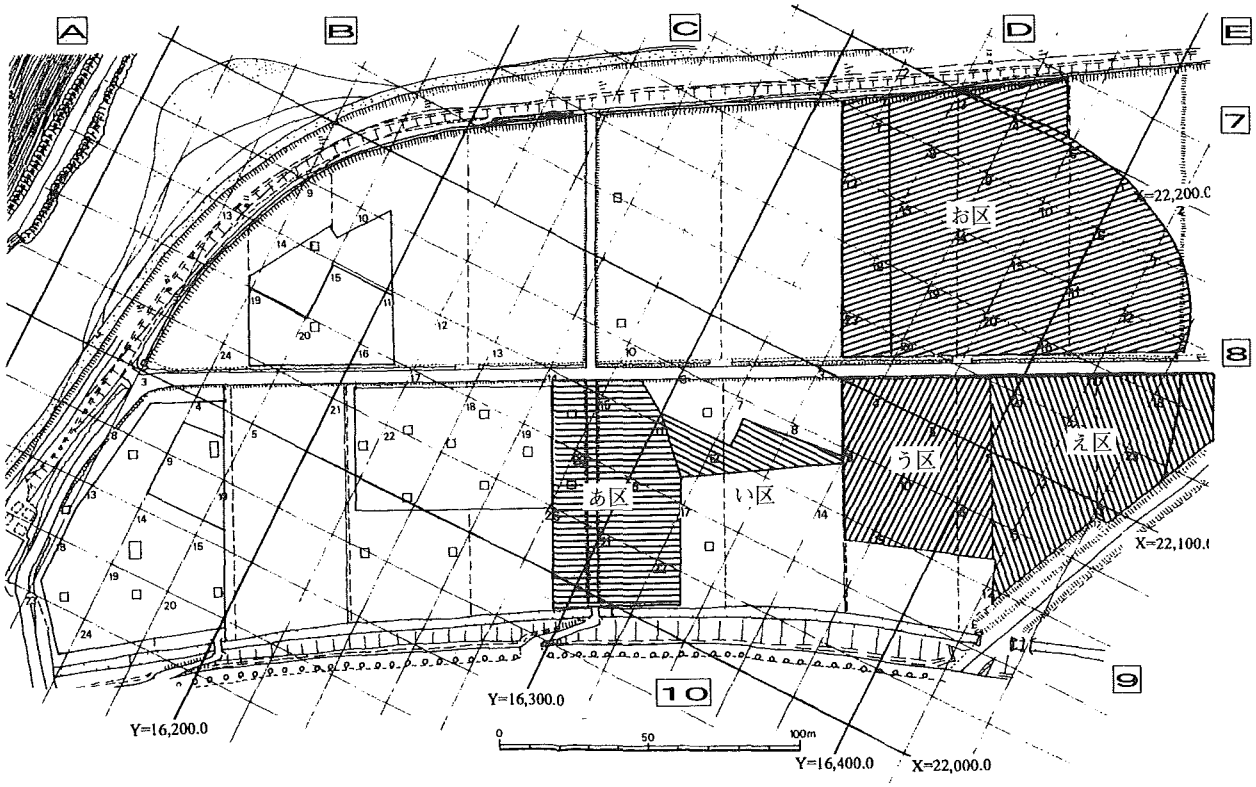


門前遺跡位置図［佐世保市北部］（S＝1／25,000）

調　査

今年度の調査は，遺跡の東部を中心とした地域の15,150 m² と，昨年度からの継続調査分600 m² を加えた，15,750 m² について発掘調査を実施した。この他に2,700 m² の表土剥ぎを行った。調査区は，座標系に合わせて南北を主軸とする100m方眼の大グリッドを設定し，東西をA～E，南北を1～10と符号し，さらに大グリッド内を20m方眼で区画して中グリッドを設定，1～25の番号を付した。また，便宜上昨年度からの継続調査地区をい区，その西側をあ区，東側をう区とえ区，農道より北側をお区と呼称した。なお，あ区は表土剥ぎのみを実施した。他区は，基本的には1層の耕作土と2層の平成5年度圃場整備


門前遺跡全景（北東から）



平成16年度門前遺跡調査区及びグリッド配置図（S＝1／2,500）

時の整地層を，場所によっては旧河道内堆積礫層も重機によって掘削した後に調査を開始した。

調査の結果，縄文時代早期・前期・後期・晩期，弥生時代後期・終末期，古墳時代初頭，古代末～中世，近世の遺構・遺物が検出・出土した。

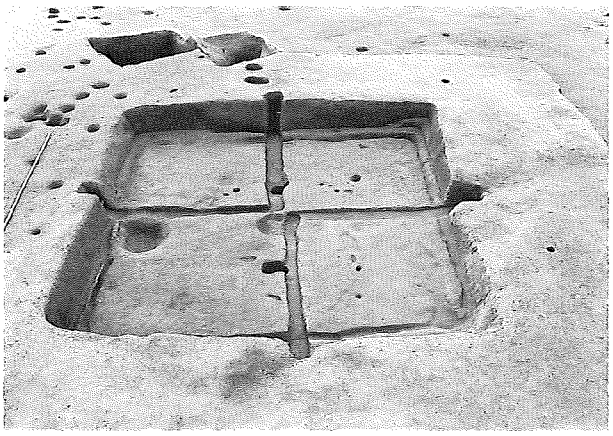
い区では，縄文時代早期末から前期までの遺構・遺物が連続した層位で検出・出土した。まず，縄文時代早期末のものでは遺構は検出していないが，遺物では施文として撚糸文を器面全体に施し，貼り付け隆帯を口縁部には縦横に，また胴部にも二重に貼りめぐらした深鉢が，ほぼ完全な形で出土した。次に，縄文時代前期のものでは，遺構は焼石を伴う集石が2基，炭化物集中箇所が4箇所，焼土21基などが検出した。遺物は，轟式土器，西唐津式土器，曽畑式土器が連続した層位で出土した。また，それらの土器に共伴して，スクレイパー，石匙，打製・磨製石斧，石鏃，石錐等の石器類，玦状耳飾りなどの装飾品が出土した。本調査区から東に続くう・え区でも縄文土器が出土したが，内容的には西唐津式土器以降のものが中心を占めること，また，前年度の調査地区である，本調査区西側40 m程の所では，本調査区と同様の遺物の出土状況が見られることから，門前遺跡における縄文時代の遺物包含層は，い区から西側にかけて最も厚く堆積しているものと思われる。来年度の調査によって，前年度と今年度の調査区との繋がりや，本遺跡内での縄文時代の遺物包含層の広がりがさらに明らかにされよう。

う・え区では，上層部において，17世紀後半以降の近世河道，柵列，弥生時代や古墳時代の掘立柱建物，竪穴式住居1棟，石棺墓1基，多数の柱穴群を検出した。下層部においては，縄文時代晩期の河道を検出した。近世河道は，数条確認され，埋土は灰色砂質土である。調査区の北東から南西方向，

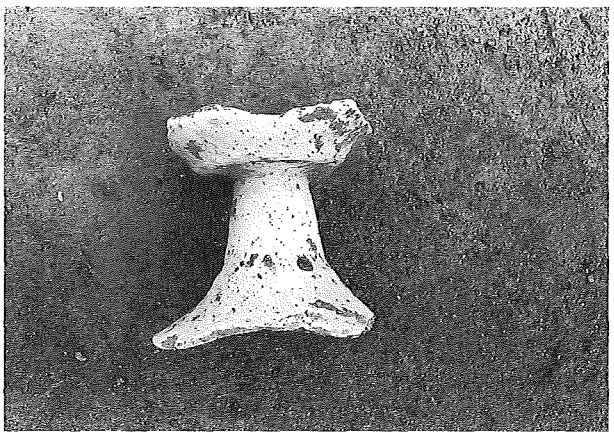
い区縄文時代早期末土器出土状況

う区掘立柱建物柱穴検出状況

また逆方向にかけてはしっている。出土遺物は型紙刷り磁器片が出土しており，17世紀後半以降のものと考えられる。掘立柱建物は現在数棟確認されているが，最大のものは柱穴が暗灰色粘質土の埋土で，検出した段階では瓢箪形をしていた。4間×4間を呈するが，西側は攪乱を受けており，また南側部分の柱穴は柱間が狭くなっている。出土遺物は土器片のみであるが，時期は弥生時代後期と考えられる。竪穴式住居は1棟確認され，3回作り替えを行なっていた。検出時は黒色砂質土の方形を呈していた。十字にトレンチを入れた結果，新旧2つの床面が確認された。新住居は中央に楕円形の炉を備え，2回作り替えたと考えられる。柱穴は3箇所確認したが，おそらく4本柱と思われる。床面は炉に向かってやや傾斜しており，貼り床や壁溝は検出されなかった。遺物は甕・壺・鉢等が出土し，古墳時代初頭のものと考えられる。旧住居は，新住居の床面より20 cm程下から検出した。周囲に壁溝を巡らし，貼り床を施していた。中央には円形の炉を備え，隅丸方形の屋内土壙を北側に備えている。炉以外に，北西部分に地床炉も検出した。遺物は壺・高坏が出土し，弥生時代終末のものと考えられる。また旧住居内からは別の壁溝も検出しており，さらに一回り小さく古い住居が存在したと考えられる。炉と屋内土壙がともに旧住居のものの下から検出した。遺物は，土器片しか出土していないが，重複関係によって弥生時代終末より前段階の住居跡と考えられる。石棺墓は竪穴式住居北側で検出した。検出時は黄橙色土の隅丸長方形プランであった。長軸が約1 m，短軸が約40 cmと小型である。軸は東西方向を向いており，平成14年度検出の石棺墓群とほぼ同じである。出土遺物は土器片



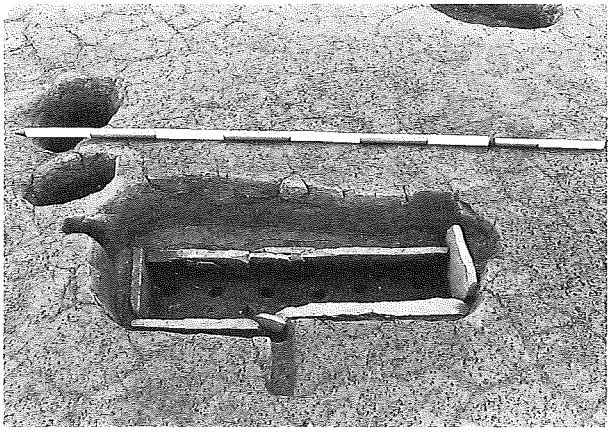
え区竪穴式住居跡（旧）検出状況



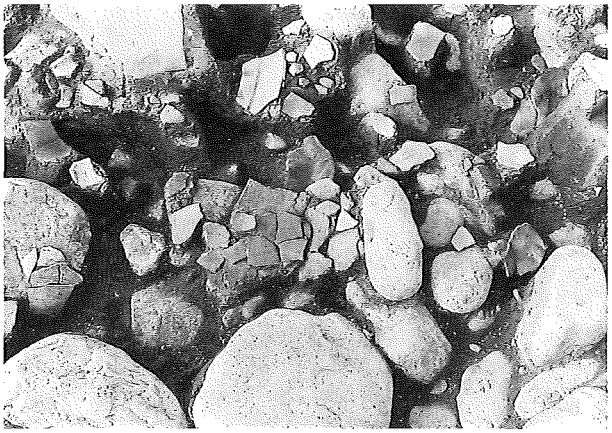
え区竪穴式住居跡（旧）土器出土状況

のみで，時期は周囲の遺構から弥生時代終末と考える。縄文時代晩期の河道は，前年度の調査により確認され，縄文時代晩期から弥生時代の河道と考えられていた。今年度の調査ではう・え区を北東から南西方向へ，調査区を横切る形で確認した。埋土は黄褐色砂質土と灰黄褐色砂質土である。埋没時期は，遺物が黒色磨研土器片や粗製土器片のみしか出土していないこと，前年度の出土遺物の再検討などにより，縄文時代晩期である事が確認された。

お区は，中世以降の旧河道により，それ以前の堆積が分断されているため，遺構・遺物共に散漫な検出，出土状況であったが，東南部の農道北側部分において，曽畑式土器が出土し，縄文時代前期の包含層を確認できた。い区及びう・え区北側の縄文時代前期包含層との関連性が考えられる。旧河道は4条を検出したが，いずれもより新しい時期の旧河道に分断され，一部分のみ確認できた。縄文時代晩期の河道では，河床面南側においてピットの底面と思われる遺構3基を検出した。黒色磨研土器などの縄文時代晩期の土器，石鏃・掻器・剥片・磨製石斧等の石器が出土した。古代末～中世前半期の河道からは，土師器・黒色土器・瓦器・陶磁器・石鍋等が出土した。中世の河道からは，巨大な流倒木及び，土師器・陶磁器・石鍋等が出土した。残る1条の河道からは，巨大な流木及び，時期不明の土器片が出土した。



え区石棺墓石蓋除去状況



お区縄文時代晩期河道遺物出土状況

まとめ

本年度の門前遺跡の調査成果において，まず特筆すべきは，い区で確認された縄文時代早期末から前期までの層位的に出土した土器群である。この時期の土器を編年的に型式変化が追える遺跡は，九州内において稀有であり，また層位的な出土は確認されなかったが，縄文時代中期以降の土器も晩期に至るまで出土しており，縄文土器研究において非常に貴重な遺跡であることが確認された。来年度のい区西隣地区の調査が期待される。次に，う・え区で検出した弥生時代後期から古墳時代初頭の柱穴群，掘立柱建物，竪穴式住居が注目される。いずれも集落，または集落に関連する遺構群である。集落の中心は残念ながら遺跡範囲外と考えられるが，長崎県本土部におけるこの時期の確認された集落遺跡は数例を数えるのみであり，この点からも当該遺跡の重要性が指摘でき，今後の調査の進展が見守られるところである。

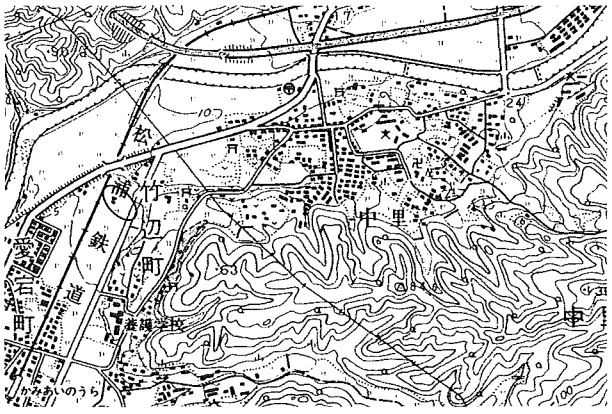
【調査担当：副島・町田・杉原・川口・寺田・石橋・栗山・松尾・江上・深澤・松原】（文責：杉原）

④竹辺（たけべ）C遺跡

所 在 地	佐世保市竹辺町	調査主体	長崎県教育委員会
調査原因	一般国道497号建設工事	調査面積	1,238 m^2
調査期間	平成16年11月15日～平成17年３月11日	調査区分	本調査
報 告 書	平成19年度刊行予定	処　　置	調査後工事

立　地

遺跡は，相浦川が形成した標高およそ11ｍの河岸段丘上に位置し，北東から南西に向けて緩やかに傾斜をしている。調査前までは，宅地および水田として利用されている。遺跡の東側には竹辺D遺跡が，西側には門前遺跡が接している。本遺跡周辺は，過去に圃場整備が行われており，その際古墳時代から中世の遺物がかなりの数，表採されたと聞く。



竹辺C遺跡位置図［佐世保北部］（S＝１／25,000）

調　査

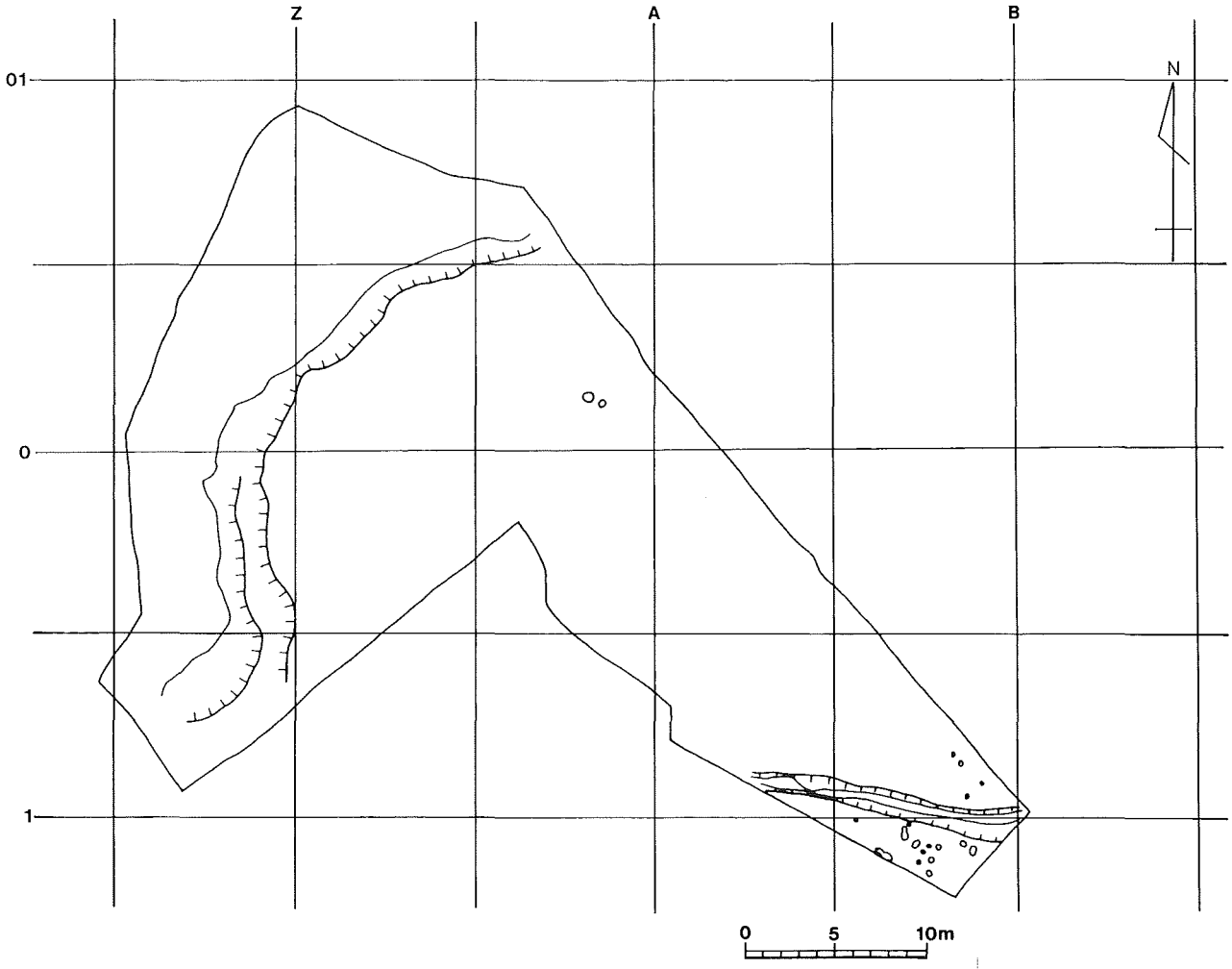
調査は，耕作土を重機により掘削した後，国土座標に基づいて10ｍ方眼にグリットを設定，人力により掘削を行った。その結果，検出された主な遺構は，弥生時代中期末から後期の土器片が伴う河川跡と，中世後半から近世にかけての遺構と考えられる溝である。

河川跡は調査区を南北方向に横断するように検出されたが，一方の岸を確認したのみで，もう一方は調査区外に当たる。溝は，遺構検出時から多数の礫が確認された。礫は拳大から人頭大で，溝の底面からやや浮いた位置で検出され，その礫の中から陶磁器片数十点と石製碾臼が１点出土した。

遺物に関しては，おもに弥生時代の土器と12世紀～14世紀頃の中世貿易陶磁器が多数出土している。弥生土器の出土状況は，本遺跡，竹辺D遺跡とともに河川の最下層からであるが，竹辺D遺跡のように高坏の出土が目立つという印象はなく，そのような差異は河川の利用目的の違いを想起させ，竹辺D遺跡と比較して居住域に近い河川の土地利用がなされていたのではないかと推定される。また，貿易陶磁器は，竹辺D遺跡からの出土遺物が14世紀代を中心とするのに対して，本遺跡からはそれより古手の様相を示している点が特徴として挙げられる。

まとめ

本遺跡では，河川跡という広範囲にまたがる遺構が確認され，隣接する門前遺跡に本遺跡の河川跡がつながる可能性もある。このことからも今後共に往時の土地利用については遺跡間で究明する必要があると思われる。



遺構配置図（S＝1／400）

遺構検出状況

溝検出状況（西から）

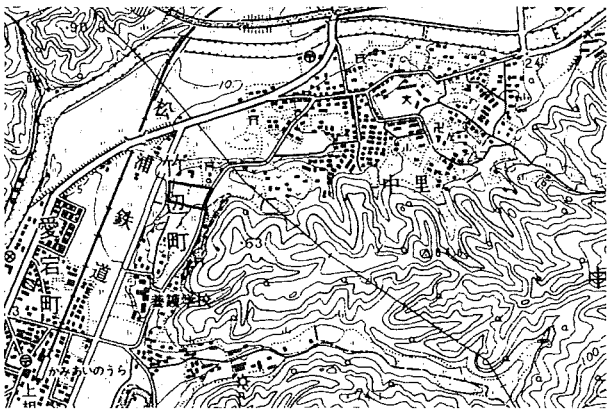
【調査担当：副島・町田・木村・大山・冨永】（文責：木村）

⑤竹辺（たけべ）D遺跡

所 在 地	佐世保市竹辺町	調査主体	長崎県教育委員会
調査原因	国道497号建設工事	調査面積	3,012 m²
調査期間	平成16年6月7日～平成16年11月25日	調査区分	本調査
報 告 書	平成18年度刊行予定	処　　置	調査後工事

立　地

遺跡は，佐世保市北部を東から西へ流れる相浦川が形成した河岸段丘上に位置し，地形の特徴から2地点に分けることができる。遺跡の東側部分は，遺跡の北から南に流れる小沢により浸食され，緩やかな谷の形状を呈し，水田として利用されている。標高は，およそ16.5 m である。遺跡の西側部分は，標高およそ18 m で小丘陵となり，住宅地や畑地として利用されている。この丘陵は，西側が比高差7 m の段を持ち，下がった地点から竹辺C遺跡が始まる。



竹辺D遺跡位置図［佐世保北部］（S＝1／25,000）

遺跡の東に隣接する丘陵は，1422（応永29）年宗家松浦13代盛によって築かれた城とされる武辺城跡である。武辺城は，佐世保市教委による主郭の発掘調査で，14～16世紀の陶磁器が出土した。また，遺跡の北100 m には，平安時代の末にこの地を開拓した武部胤明が創建したとされる大宮姫神社がある。遺跡周辺には，松浦氏の墓所をはじめ中世の石造物が数多くみられ，竹辺C遺跡・殿平遺跡・新田遺跡等の中世の遺物散布地が確認されており，当遺跡一帯は，古代末から中世にかけての遺跡集中地区である。

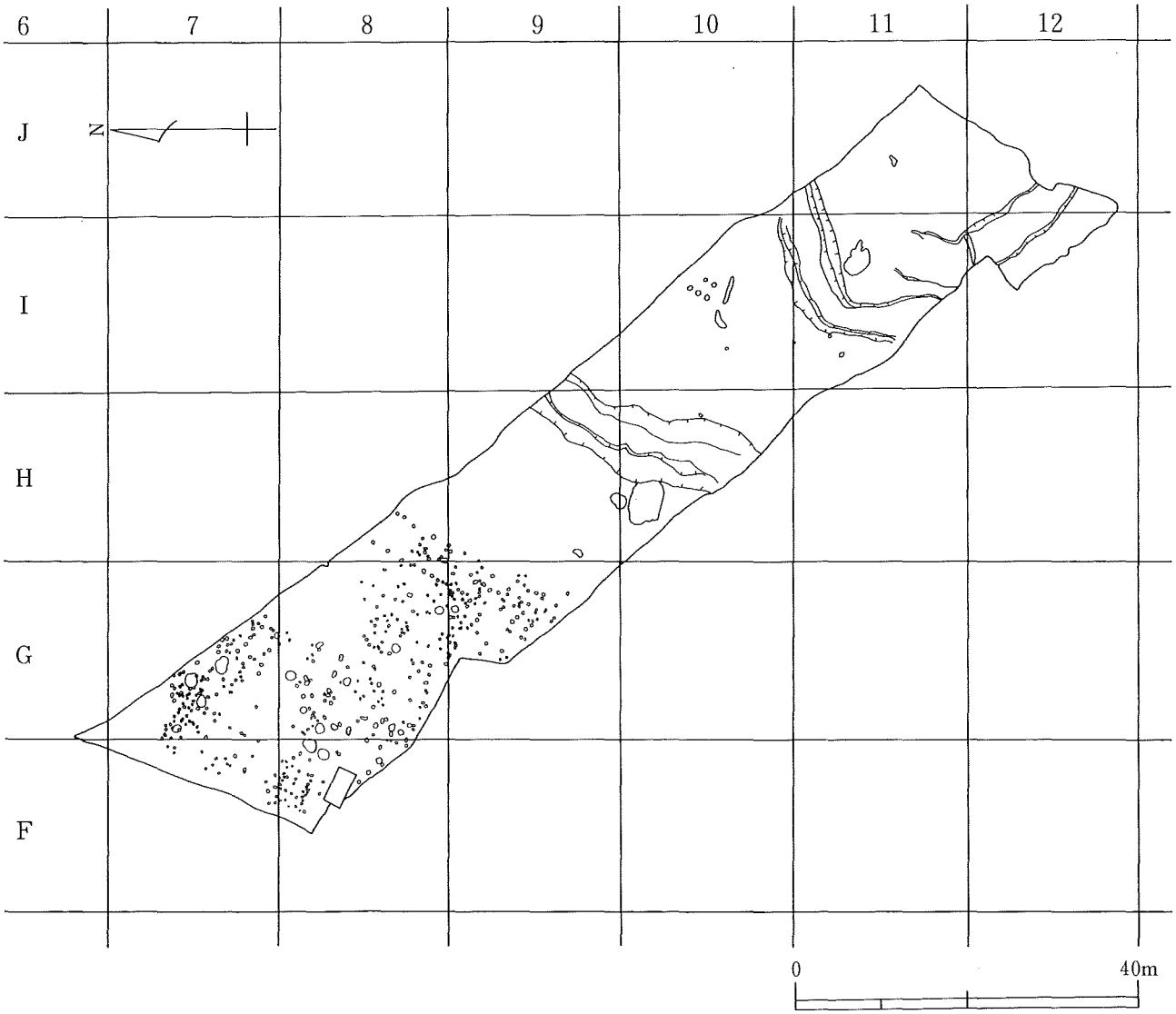
調　査

1層の耕作土を重機により掘削した後，国土座標に基づいた20 m 方眼のグリットを設定し，人力により掘削を進めた。その結果，西側部分の丘陵と東側部分の谷では遺構・遺物に特徴が見られた。

丘陵上からは，中世のピット550基・土坑20基・掘立柱建物6棟を検出し，旧石器時代の遺物包含層を確認した。遺物としては，旧石器時代の遺物包含層から数点ではあるが細石刃核・細石刃・ナイフ型石器が，ピットや土坑からは中世の土師質土器や18世紀代を中心とした近世の国産陶磁器が多く出土した。谷部からは，礎石建物1棟・溝2条・河川跡3条を検出し，中世の遺物包含層を確認した。谷部の中世包含層からは14世紀代の中国産陶磁器が，河川跡からは弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器が多く見られた。器種として高坏の量が際だっており，河川での祭祀行為が行われた可能性も考えなければならない。

まとめ

竹辺D遺跡発掘調査地区は，記録保存を行ったので工事に支障はないと思われる。なお，当該遺跡については，次年度も継続調査を実施する予定である。



遺構配置図（S＝1／400）

遺跡近景

調査風景

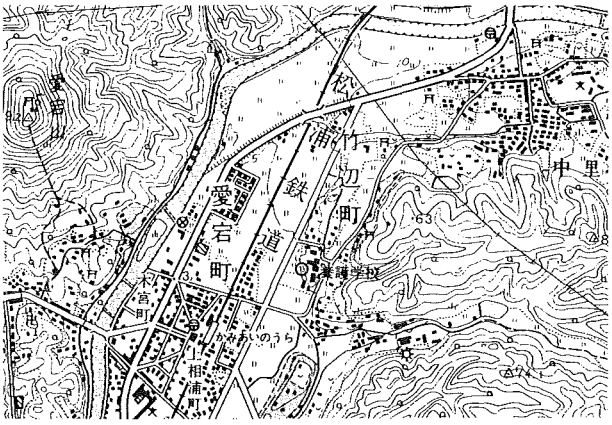
【調査担当：副島・町田・川畑・木村・大山・冨永】（文責：川畑）

⑥竹辺（たけべ）D遺跡

所 在 地	佐世保市竹辺町810番地	調査主体	長崎県教育委員会
調査原因	県立佐世保養護学校建て替え工事	調査面積	48 m²
調査期間	平成16年８月９日～８月13日	調査区分	範囲確認調査
報 告 書	刊行予定なし	処　　置	慎重工事

立　地

遺跡は相浦川が形成した河岸段丘上に立地する。遺跡地図では上位段丘面を竹辺D遺跡，下位段丘面は竹辺C遺跡として扱っている。武辺城跡のある古城山の裾部が西～南側へ緩やかな傾斜をみせるところに段丘は形成され，標高はおよそ18 m から11 m を測る。



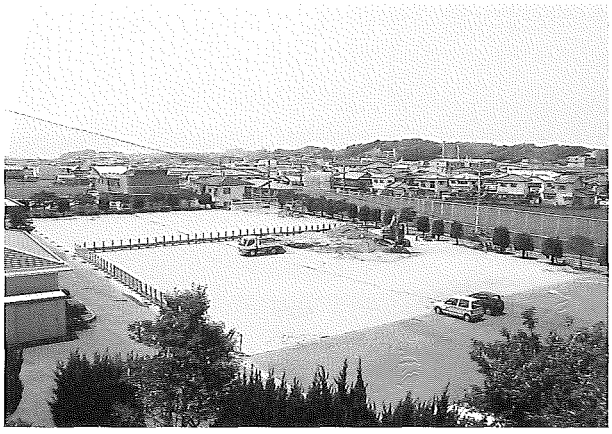
竹辺D遺跡位置図［佐世保北部］（S＝１／25,000）

当遺跡はこれまでの調査で，縄文時代～中世の遺物包含地であることが確認されている。なかでも中心をなすのは中世で，平安末期にこの地を開拓した武辺氏に由来する大宮姫神社や14代松浦定（1492年没）の墓所がある阿弥陀堂も付近には所在する。

今回の調査地点は竹辺D遺跡の南端にあたり，地形的には丘陵部から平野部へ移行する傾斜変換点に位置する。現地は周囲の水田よりも２～３m 盛土造成されているようで，今は県立佐世保養護学校の運動場として利用されている。

調　査

調査は校舎建て替えが計画されている運動場北半部で実施した。厚く堆積した埋土を除去する必要があったことから，８m×６m の範囲に法面を設けて徐々に重機掘削を行い，旧地表（水田面）に達してからは２m 四方の試掘坑を設定して人力で掘り下げた。


調査区遠景

実際に掘削を行ったところ，運動場には真砂土と砂利がそれぞれ20 cm 厚で一面に敷かれ，その下は２m ほど埋土であることが判明した。また，旧地表（水田面）は現地表から2.3～2.4 m 下で確認できた。遺構・遺物の有無を調べるため，そこからさらに80 cm 程度掘り下げたが，河川堆積によると思われる礫が厚く堆積し，常に浸水するような状況で，何ら成果を得ることはできなかった。

なお，旧地表（水田面）以下の土層堆積は次のとおりである。

Ⅰ層：暗灰褐色粘土層（旧水田面）

Ⅱ層：灰黄褐色粘土層（旧水田の床土，黄褐色の鉄分沈殿物が筋状に入る）

Ⅲ層：黄灰褐色混礫層（50 cm 大までの円礫が大半を占める）

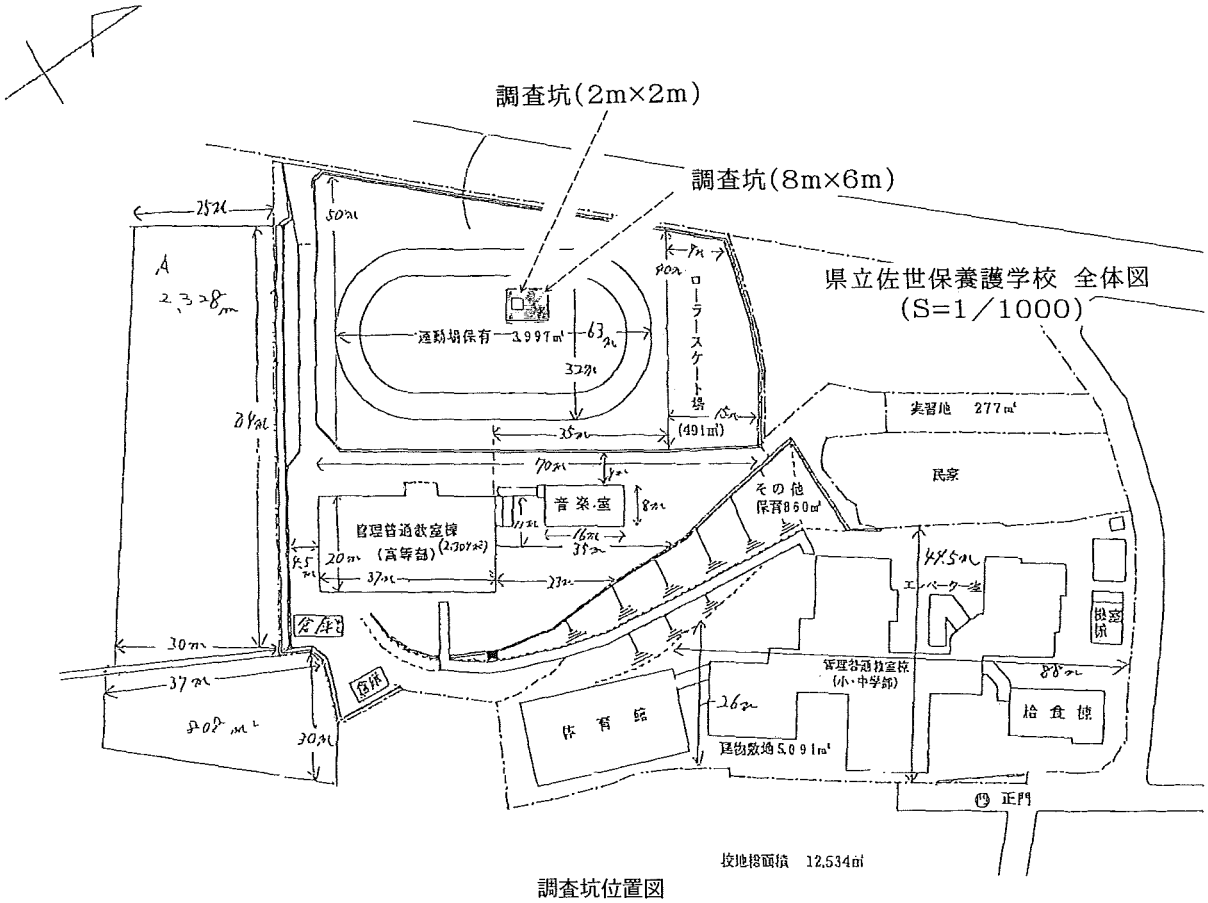
Ⅳ層：明黄褐色混礫層（人頭大の円礫が大半で，Ⅲ層より明るく白っぽい）

周囲の水田部には常に水が引かれている時期でもあり，今回の調査区での浸水もそのことと無関係ではないだろう。これより南側の新田町は江戸時代の干拓地であったことを考えあわせると，干拓事業後に土地利用が可能になった場所と思われる。遺跡の立地としては養護学校の校舎がある東～北側丘陵部が適当であり，低地にあたるこの部分は水位の低下によるか，水晒場としての利用に限定されることになろう。

まとめ

昨年度，佐世保教育事務所が実施した同遺跡の確認調査では，円礫がぎっしり詰まった灰褐色砂質土層の下は地山であったと記す。Ⅲ・Ⅳ層にみられた礫の堆積がどの時期のものか判断できないが，遺跡が存在する可能性は乏しい。

【調査担当：本田・山田】（文責：本田）



調査坑位置図

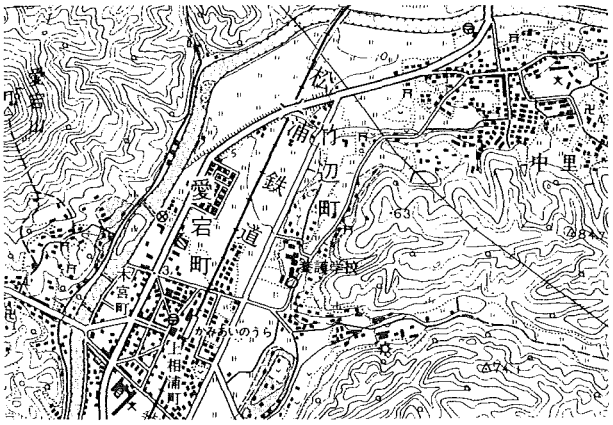
⑦竹辺（たけべ）D遺跡

所 在 地	佐世保市竹辺町822－1他	調査主体	長崎県教育委員会
調査原因	佐世保養護学校建て替え工事	調査面積	16m²
調査期間	平成16年12月 6 日～12月10日	調査区分	範囲確認調査
報 告 書	刊行予定なし	処　　置	慎重工事

立　地

遺跡は相浦川が形成した河岸段丘上に立地する。上位段丘面を竹辺D遺跡，下位段丘面は竹辺C遺跡として周知されている。

当遺跡は縄文～中世の遺物包含地であり，その東側には平安末期にこの地を開拓した武辺氏の山城・武辺城がある。周辺には大宮姫神社や阿弥陀堂が，西北側の相浦川沖積地には縄文～中世の遺構や遺物が発掘された門前遺跡がある。



竹辺D遺跡位置図［佐世保北部］（S＝1／25,000）

今回の調査地点は，竹辺D遺跡の南端にあたり，地形的には段丘上面から低地部へ移行する傾斜変換点に位置する。標高はおよそ５～６ｍ前後を測る。周囲は専ら水田として利用されているが，今回の発掘地は休耕地であり，２ｍほどの草が繁殖していた。調査後は，県立佐世保養護学校の運動場造成のため埋め立てられる予定になっている。

調　査

除草後，2ｍ×2ｍの試掘坑（以下，ＴＰと略す）を地形の傾斜に沿って東西方向に４ヶ所設け，発掘調査を実施した。標高の高い方から順にＴＰ１～４と番号を付した。ＴＰ１～４の比高差は約1.5ｍほどである。

土層堆積は次のとおりである。

１層：茶灰褐色粘土層（表土・耕作土）

２層：明褐色土層（赤色鉄分粒を含む）

３層：黄橙灰褐色土層（鉄分層で水田の床土）

３Ａ層：マンガン粒混淡黄褐色粘質土層
（上面にマンガン粒を多く含む）

４層：混礫淡灰黄褐色砂質土層
（マンガン粒は少ない）

調査風景

5層：淡灰青褐色粘質土層（赤褐色の鉄分粒が縦筋状に入る）

5Ａ層：淡灰青褐色粘質土層（赤褐色の鉄分粒が縦筋状に入るが，５層ほどではない）

6層：暗灰青色粘土層（一部は黒灰色を呈する固く締まった粘土）

7層：混礫暗灰青色粘土層（６層に礫が混在する）

ＴＰ１では１～４層がうかがえた。ＴＰ２・３では１・２層の下は５～７層となり，ＴＰ４では１層の下はすぐ６層に移行する状況であった。

まとめ

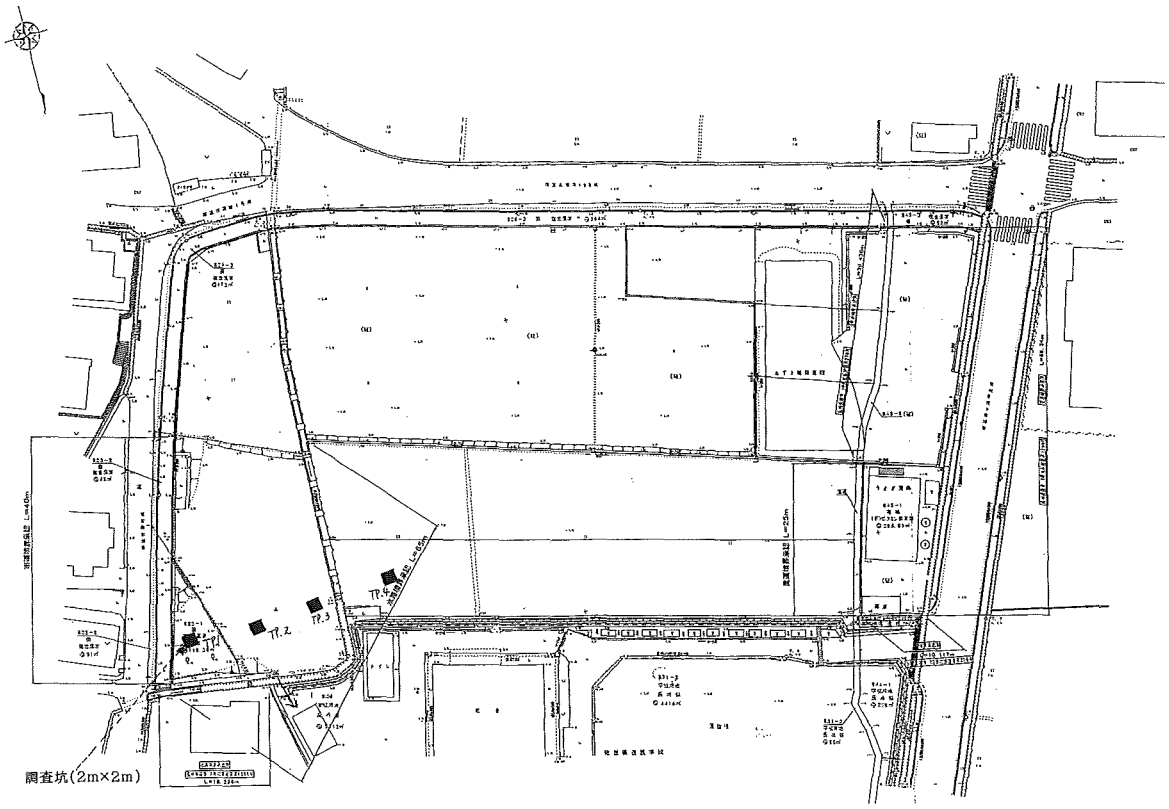
ＴＰ２～４は常に浸水した還元土壌であることから，遺跡が存在する可能性は低い。ＴＰ１は遺跡としての立地条件は揃っているものの，遺構や遺物の出土はなかった。

ＴＰ１は微高地で，上位段丘面から下位段丘面へと移行する部分にあたり，ＴＰ２～４の土層とは基本的に異なる。ＴＰ２～４はむしろ，平成16年８月に実施した発掘調査区の土層とほぼ同一であるといえよう。

ＴＰ１とそれ以外のＴＰとの比高差を考えると，ＴＰ１の段丘面までが中世の陸地部分で，ＴＰ２～４は潟地もしくは低湿地であったと推測できる。

今回の調査地点の南西側はより低位であることから，谷が東側に深く入り込む入江になっていたと思われる。ここは武辺城の直下にあたり，船溜り的な場所であったとしてもおかしくはなかろう。

【調査担当：本田・吉野】（文責：本田）



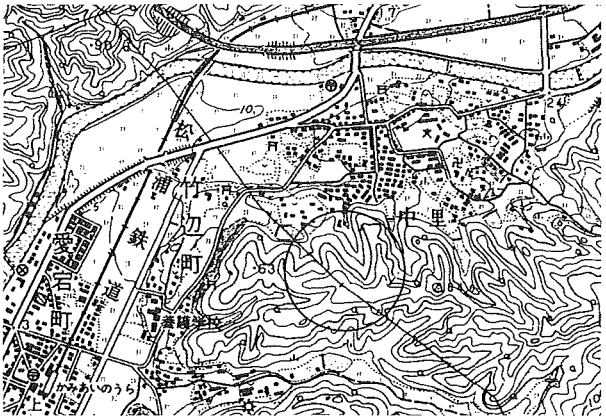
調査坑位置図

⑧武辺城跡（たけべじょう）

所 在 地	佐世保市竹辺町	調査主体	長崎県教育委員会
調査原因	国道497号建設工事	調査面積	144 m²
調査期間	平成17年１月11日～平成17年３月１日	調査区分	範囲確認調査
報 告 書	平成19年度刊行予定	処　　置	次年度以降本調査

立　地

遺跡は，佐世保市北西部の将冠岳から弓張岳に連なる山系から西側に伸びる標高約60ｍの丘陵先端部に立地している。遺跡の南西前方には相浦川河口域が開け，遺跡から相浦川の河口までの距離は約３km と外海に非常に近い。また，遺跡周辺には江戸時代以降の炭鉱山が多く，遺跡内には現在も多数のボタ山が見受けられる。



武辺城跡位置［佐世保北部］（S＝１／25,000）

調　査

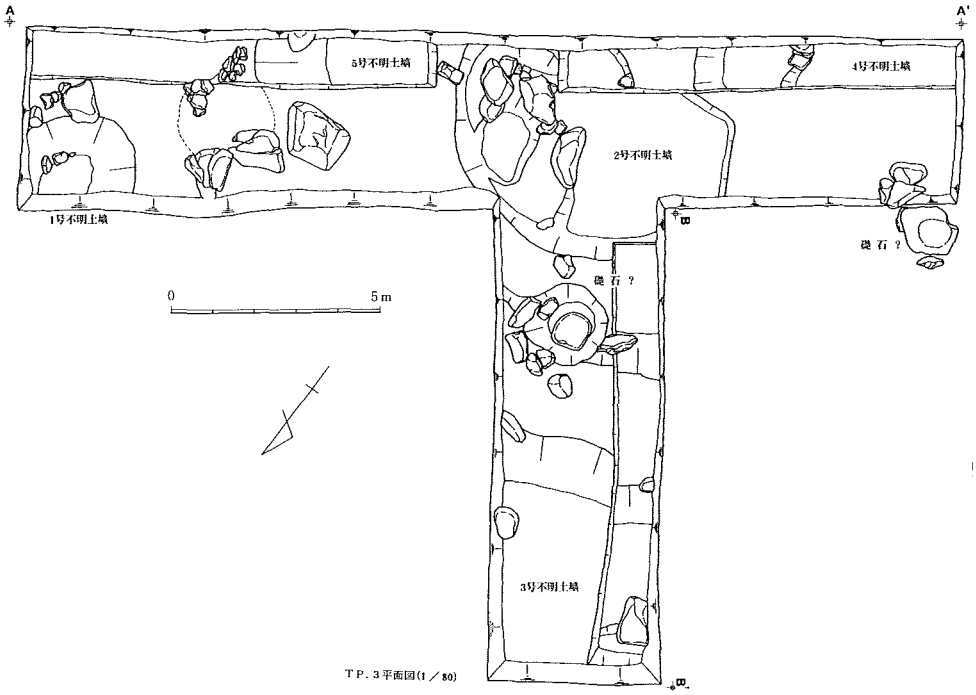
武辺城跡はこれまでの分布調査などで，主郭・北郭・西郭・南郭・東郭が確認されている。西九州自動車道の工事区域には，西郭先端部のひょうたん形の丘陵（西郭部）と，南郭に至る尾根の一部（南郭部）が含まれ，武辺城跡内の工事区域21,000 m² の中に，９ヶ所144 m² の調査壙を設定した。

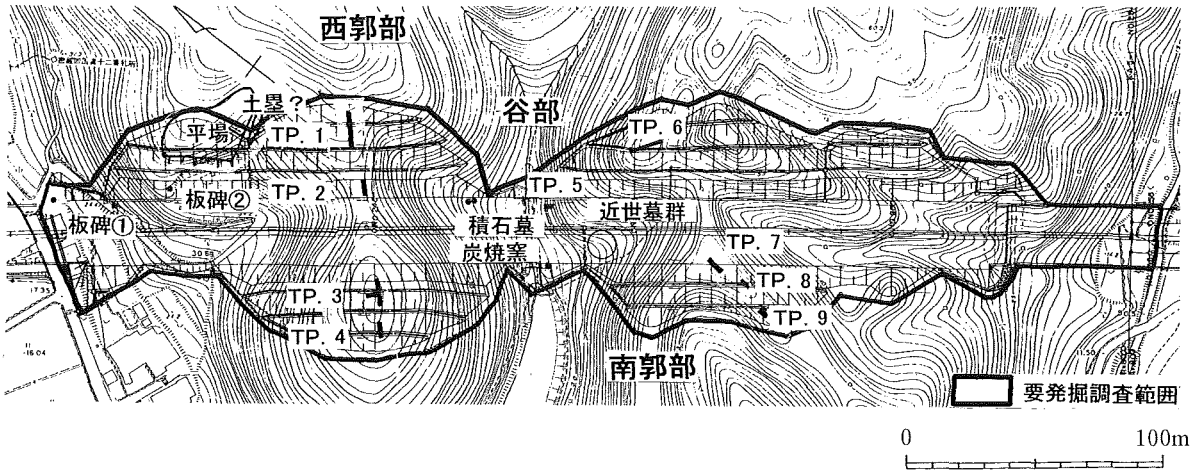
遺構は，西郭部ではＴＰ３に客土による整地層が確認され，礎石なども伴うことから，物見台などの遺構が推測される。また，今回未買収のため調査ができなかったが，西郭部北東に平場や土塁状の地形が確認されることから，人為的な造成が行われたという可能性が高い。北面の山裾に中世の石塔群が存在することも，これを裏付けるものと考える。南郭部について今回の調査区では遺構などは確認されなかったが，南郭に至る通路上にあたるため，堀切・柵列などの防御機能を有する遺構が存在する可能性がある。また，ボタ山で旧地形が確認できない丘陵も数ヶ所みられ，平場などを形成する可能性もある。谷部では伝大手口の通路に面して両側に平場や階段状の遺構が造りだされており，積石墓など墓域があることから，その遺構の性格を確認すべきである。遺物は，遺構に伴うものとして，ＴＰ３の整地層から弥生土器が出土したが，武辺城跡に関連する遺物は出土していない。ただ，武辺城跡周辺に中世陶磁器の散布が確認されることから，近隣に遺物を伴う遺構の存在が推測される。

まとめ

以上の結果から，工事区域内の21,000 m²については工事着手前に発掘調査および地形測量が必要である。また，板碑・石塔・墓石などの取り扱いについても事前に協議が必要である。

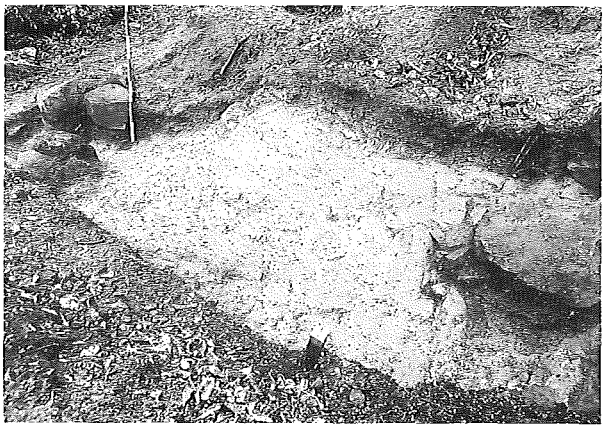
【調査担当：副島・町田・寺田・栗山】（文責：栗山）





調査区および関連遺構位置図（S＝1／4000）

調査風景



谷部造り出し検出状況

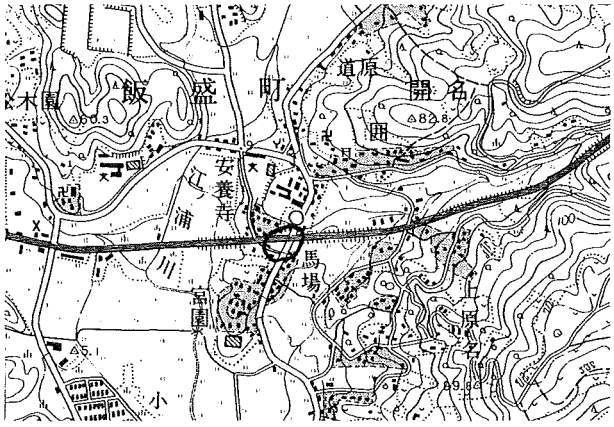
⑨開（ひらき）遺跡

所 在 地	長崎県諫早市飯盛町開	調査主体	長崎県教育委員会
事 業 名	主要地方道諫早飯盛線道路改良工事	調査面積	12 m²
調査期間	平成16年11月29日～12月２日	調査区分	範囲確認調査
報 告 書	平成18年度刊行予定	処　　置	本調査

立　地

開遺跡は，飯盛町の中央部に拡がる後背湿地の北東部に位置し，標高15～16ｍの舌状台地の中央部に立地する。周辺には囲城跡，岡城跡，普同寺下遺跡など中世の遺跡が点在する。

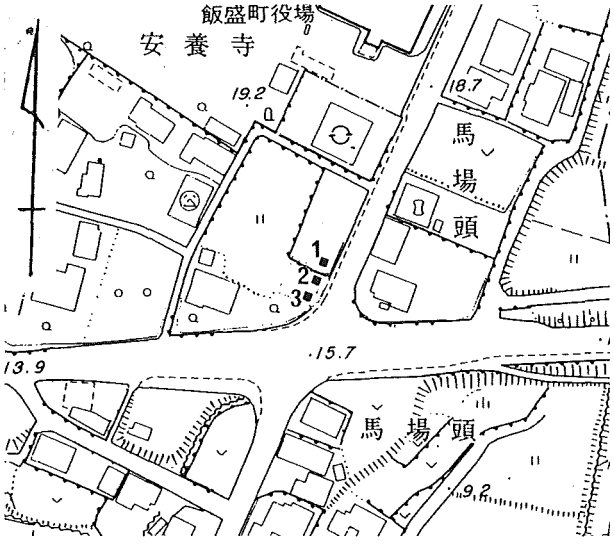
1971（昭和46）年の国道251号線道路改良工事に伴う緊急発掘調査の際には，県道との交差点の北東地点より柱穴状ピット群・溝状遺構などの遺構や土師質土器・須恵器・青磁・滑石製品などが検出されており，開遺跡が中世の集落跡であった可能性が指摘されている。(『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅴ』1982)



開遺跡位置図［諫早南部］（S＝1／25,000）

調　査

今回の調査は県道拡幅に伴うもので，国道251号と県道の交差点の北西地点に，２ｍ×２ｍの試掘坑を３箇所（北からＴＰ１～３）設定した。この地点は調査の直前まで個人の住宅などが建っていたところで，県道拡幅のため立ち退いた跡地である。個人の住宅が建つ以前は，水田であったといわれている。基本土層は１層―表土（客土及び浅黄色粘質土），２層―黒褐色土（遺物包含層），３層―黄色粘質土（地山）である。



調査区配置図（S＝1／2,500）

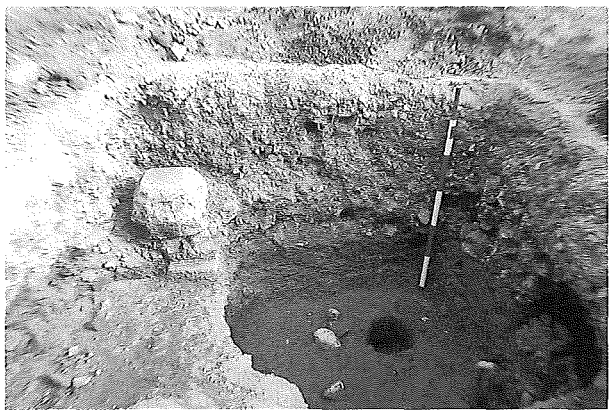
ＴＰ１は調査地区の最も北側に設定した試掘坑である。１ｍ程の客土があり，その下も撹乱著しく，ＴＰ２・３で見られるような遺物包含層（２層）は残っていない。しかし，３層に堀込んだ柱穴状のピット１箇所及びピット内より土師質土器の杯片が出土した。ＴＰ２はＴＰ１の南へ約５ｍの地点に設定した試掘坑である。試掘坑の南西に大きな撹乱（浄化槽等の穴）があったが，遺物包含層（２層）

が薄いながらも残存している。この２層から３層に堀込んだ柱穴状のピット４ヶ所・ピット内より土師質土器・白磁片・青磁片が出土した。ＴＰ３はＴＰ２の南へ約５ｍの地点に設定した。ＴＰ２よりも良好に遺物包含層（２層）が残っており，２層から３層に堀込んだ柱穴状のピット４箇所・土坑１基（ＳＫ１）・溝状遺構１条（ＳＤ１）の遺構を検出した。また，ピット内より土師質土器・滑石製石鍋片，土坑・溝状遺構内より土師質土器，包含層より土師質土器・陶磁器片などが出土した。南西隅にえな壺状の陶器が出土したが土層状況より近・現代のものと思われる。

まとめ

以上の結果から，調査区の南，つまり交差点に近くなるにつれ遺構や遺物包含層が良好に残存していることが明らかとなった。また，調査区全体に中世と思われる時期の遺構が拡がることが予想され，当該地域の中世集落の在り方を考える上において貴重な資料となり得るであろう。

【調査担当：山下・和田】（文責：山下）



ＴＰ１東壁

ＴＰ２北壁

ＴＰ３遺構検出状況

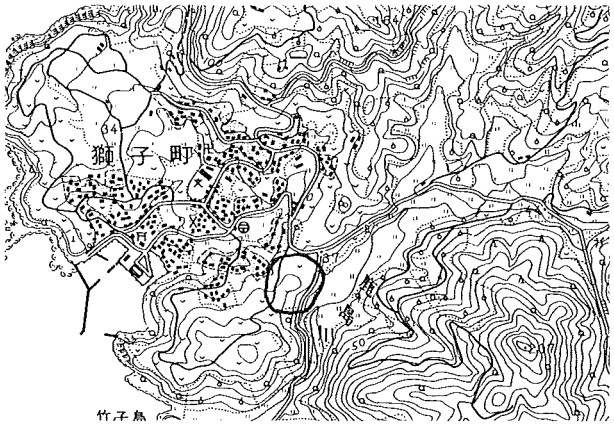
石鍋検出状況

⑩獅子第１遺跡

所 在 地	長崎県平戸市獅子町	調査主体	長崎県教育委員会
調査原因	主要地方道平戸田平線道路改良工事	調査面積	16 m²
調査期間	平成16年８月９日～８月13日	調査区分	試掘調査
報 告 書	刊行予定なし	処　　置	調査後，工事

立　地

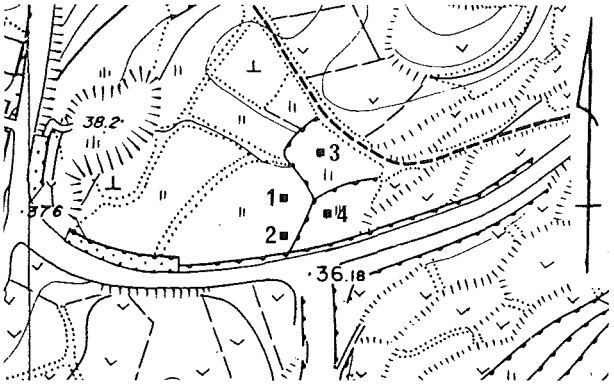
獅子第１遺跡は，平戸島の西側に位置し，標高約35～40ｍの丘陵上に立地する。遺跡の北西側には現在港を擁する獅子町の集落が開け，南東側は谷となり鹿島川が西に向かって流れている。過去の分布調査において，縄文時代の遺物散布地として知られており，現状は大部分が畑地として利用されている。



獅子第１遺跡位置図［紐差］（S＝１／25,000）

調　査

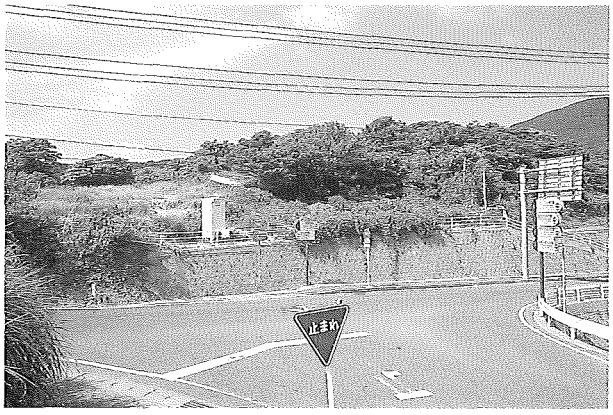
工事予定地区は，遺跡の範囲外ではあるが，切り通しの道路を隔てて獅子第１遺跡と接し同一丘陵上にあるので，今回の試掘調査を実施することとなった。工事予定地内に，２×２ｍの試掘坑を４ヶ所任意に設定し調査を行った。



調査区配置図（S＝１／2,500）

まとめ

ＴＰ１・３については岩盤まで，ＴＰ２・４については地山と考えられる赤褐色土層まで掘り下げたが，いずれの試掘坑においても遺構・遺物は確認されなかった。遺跡の主体は道路を隔てた南西側丘陵上に限定されるものと思われる。



調査区近景（南から）

ＴＰ１西壁

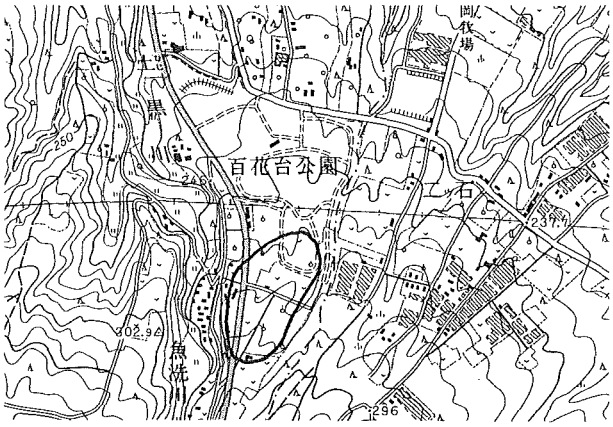
【調査担当：山下・吉野】（文責：山下）

⑪魚洗川（いわれご）B遺跡

所 在 地	長崎県雲仙市国見町金山名	調査主体	長崎県教育委員会
調査原因	地域拠点遺跡内容確認調査	調査面積	78 m²
調査期間	平成16年10月25日～11月12日	調査区分	範囲確認調査
報 告 書	平成17年度刊行予定	処　　置	調査後，埋め戻し

立　地

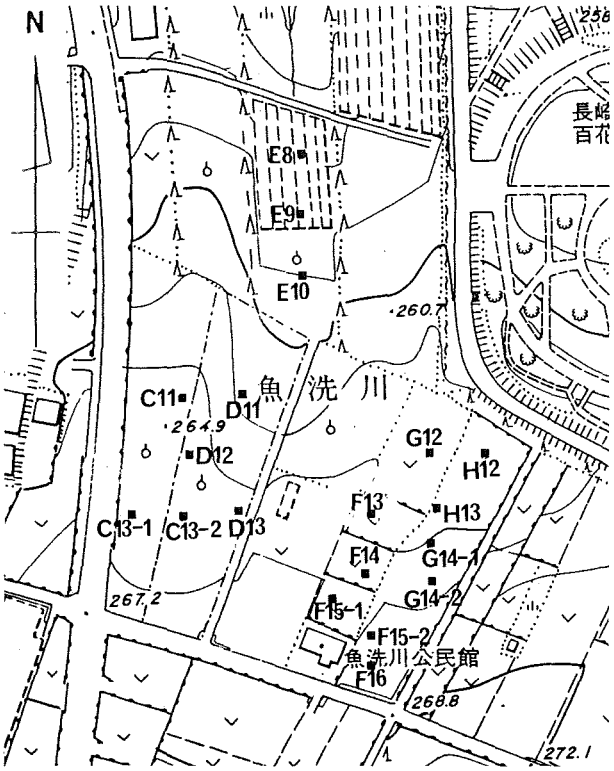
百花台遺跡群は，島原半島北部の国見町に所在し，標高200～280 m を測る火山性山麓扇状地の扇頂にあたる緩傾斜面に展開している。この遺跡群は百花台A～F遺跡および魚洗川A～C遺跡からなり，魚洗川B遺跡は，この遺跡群中最南端に立地する。百花台遺跡群の調査は，1963（昭和38）年以降数次にわたり調査が実施されているが，これらの調査によって，縄文時代の遺物包含層のほか，旧石器時代の文化層が層位的に検出されており，この時代の石器組成や構造を解明する上で重要な成果が上がっている。



魚洗川B遺跡跡位置図［島原］（S＝1／25,000）

調　査

調査は，将来の百花台広域公園の拡張事業に備えるもので，平成15年度から継続して範囲確認調査を実施している。昨年度，設定された20 m メッシュを利用し，地形に応じ2 m× 2 mの試掘坑を18箇所，2 m× 3 m を1箇所，計19箇所を設定し調査を実施した。土層は試掘坑によって差異が見られるが，概ね百花台遺跡群の基本層序と同様である。



調査区配置図（S＝1／2,500）

谷部であるE－8・E－9は，百花台遺跡群のⅡ層（黄褐色火山灰土層）上面までに1.5 m 程の縄文時代の遺物包含層を含む土層堆積が見られた。特にE－8においては，200点ほどの縄文土器片・黒曜石剥片が出土し，Ⅱ層内に土坑一基を検出した。土坑の上面には炭が堆積しており，土坑の底には径30 cm のピットを1箇所検出した。土坑の用途・性格等は不明である。

魚洗川公民館の北側（F－13～H－12）では，F－14のⅡ層で炭が集中する箇所があり，その上下からピット6箇所を確認した。またⅡ層から縄文土器片を6点検出した。F－15－1ではⅥ層（暗褐色土層）より黒曜石片が2点出土した。その他の試掘坑は，すべてⅧ層（明黄褐色土層）上面まで掘り下げたが遺構・遺物等はほとんど見られなかった。

県道沿いの調査区（C－11～D－13）においては，C－13－1のⅡ層より石斧状の石器1点を検出した。その他の試掘坑は巨石の現れたD－12を除き，すべてⅧ層上面まで掘り下げたが，遺構・遺物はほとんど検出されなかった。

まとめ

19箇所の試掘坑のうち，遺物を検出したのが9箇所（E－8・E－9・E－10・C－13－1・C－13－2・D－11・F－14・F－15－1・F－16），遺構を検出したのが2箇所（E－8・F－14）である。遺物はE－8に集中しており，他の試掘坑は土器片や黒曜石が2～3点出土したのみである。遺物の時期は，縄文晩期が主体である。

今回，旧石器時代の遺構・遺物はほとんど確認できなかったが，E－8区周辺には，縄文時代の遺物包含層が良好な状態で残存している状況が確認できた。また，F－14区周辺には，何らかの縄文時代の遺構が広がる可能性がある。

【調査担当：山下・山田】（文責：山下）

遺跡遠景（北西から）

E－8東壁

E－8遺物及び土坑検出状況

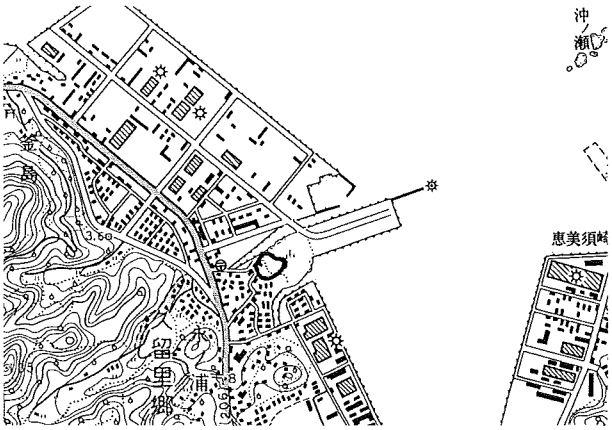
F－14北壁

⑫久留里（くるり）遺跡

所 在 地	西彼杵郡時津町久留里郷岩本282	調査主体	時津町教育委員会
調査原因	宗教施設建設	調査面積	32 m²
調査期間	平成16年４月12日～４月15日	調査区分	範囲確認調査
報 告 書	刊行予定なし	処　　置	慎重工事

立　地

遺跡は，以前，久留里崎と呼ばれていた半島の付け根部分に立地し，標高は約1.5ｍ～2.0ｍを測る。工場用地の埋め立てが行われる以前は海に面していたところであり，付近は海水浴場として利用されていた。現状は久留里川河口南岸に位置し，梅などの畑地として利用されている。

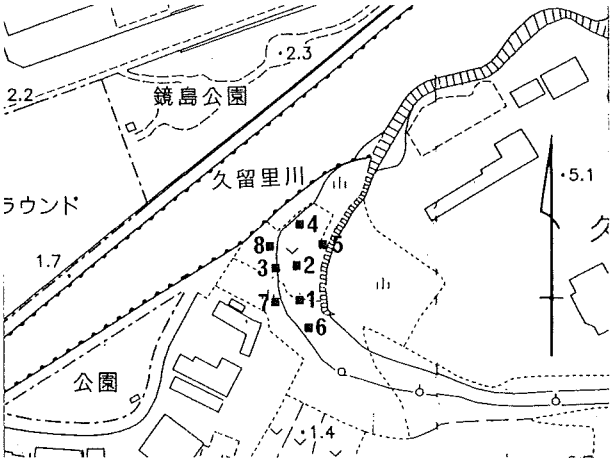


久留里遺跡位置図［長浦］（S＝１／25,000）

調　査

久留里遺跡は，戦前から遺物散布地であることが知られていたが，発掘調査は行われておらず，時期や遺跡の内容については不明な点が多かった。昭和56年の分布調査では，黒曜石片，弥生土器，青磁，土師器などが採取されており，縄文・弥生・中世の遺物散布地であることが確認されている。

今回の調査は，当該地の地権者に土地売却の意向があり，売却後宗教施設建築の予定があったため，事前に遺跡の範囲を把握すべく，時津町教育委員会が範囲確認調査を行ったものである。



調査区配置図（S＝１／2,500）

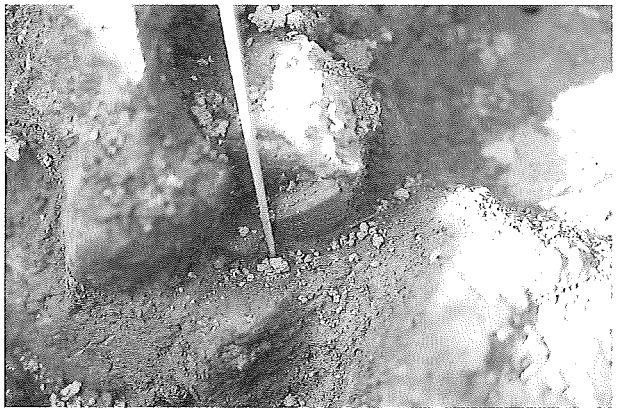
売却予定の遺跡地内に，２ｍ×２ｍの試掘坑８ヶ所（ＴＰ１～ＴＰ８）を任意に設定し調査を行った。調査の結果，ＴＰ１～ＴＰ３，ＴＰ６・７の５箇所から，曽畑式を中心とする縄文土器片が約300点，磨製石斧２点，石鏃１点などが出土した。いずれの試掘坑においても，土器片は３層（礫層）に集中的にみられ，拳大から人頭大の礫の間に入り込んだ状況で検出した。

調査区近景（北西から）

調査区近景（南東から）

調査風景

ＴＰ１東壁



ＴＰ１－遺物出土状況

特に３層下部まで掘り下げたＴＰ１においては，１ｍほど堆積する礫層から間断なく土器片が出土している。いずれの試掘坑からも遺構等は確認できなかった。ＴＰ４・５は，地山と思われる礫層上面まで掘り下げたが，遺構，遺物ともに確認できなかった。ＴＰ８は，２層礫層下部まで堀り下げたが，遺物，遺構ともに確認できなかった。

まとめ

ＴＰ１～３，ＴＰ６・７の３層（礫層）は，縄文時代前期の遺物包含層であることが確認され，久留里遺跡が当該期の遺跡として明確に位置づけられた。この遺物包含層はＴＰ２・ＴＰ３より南側に広がっていることが予想されるが，地形的に見て，遺跡の主体部は，今回の調査区よりもさらに南東側に展開するものと思われる。

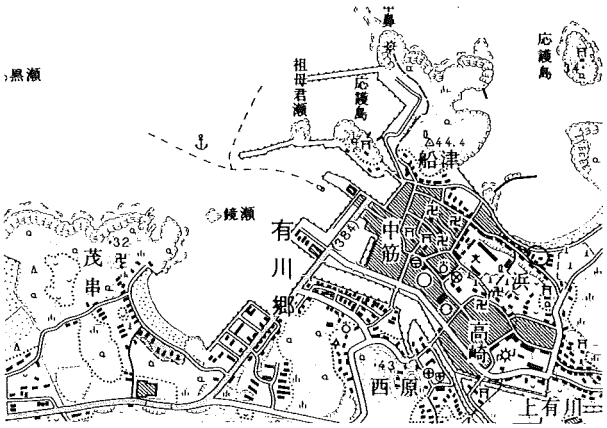
【調査担当：山下・山田】（文責：山下）

⑬浜郷（はまごう）遺跡

所 在 地	新上五島町有川郷210－1番地他	調査主体	長崎県教育委員会
調査原因	地域拠点遺跡発掘調査事業	調査面積	76.5 m²
調査期間	平成16年６月21日～７月２日	調査区分	保存目的の確認調査
報 告 書	平成17年度刊行	処　　置	現状保存

立　地

新上五島町有川郷は五島列島の北部，中通島の北東に突出した半島部に位置する。遺跡の所在する有川郷は，南を大高山・桜ヶ岳・旭岳に囲まれ，北は有川湾に面する場所にある。ここは木場川と大川が合流する地点にあたり，上五島では数少ない平地が形成されているため，古くから政治・経済の中心地として発達してきた。北東方向の海浜部には，旭岳から派生した低丘陵に沿って弓なりに砂の堆積がみられ，浜郷遺跡はその砂丘上の標高５～７ｍ付近に立地する。



浜郷遺跡位置図［有川］（S＝1／25,000）

調　査

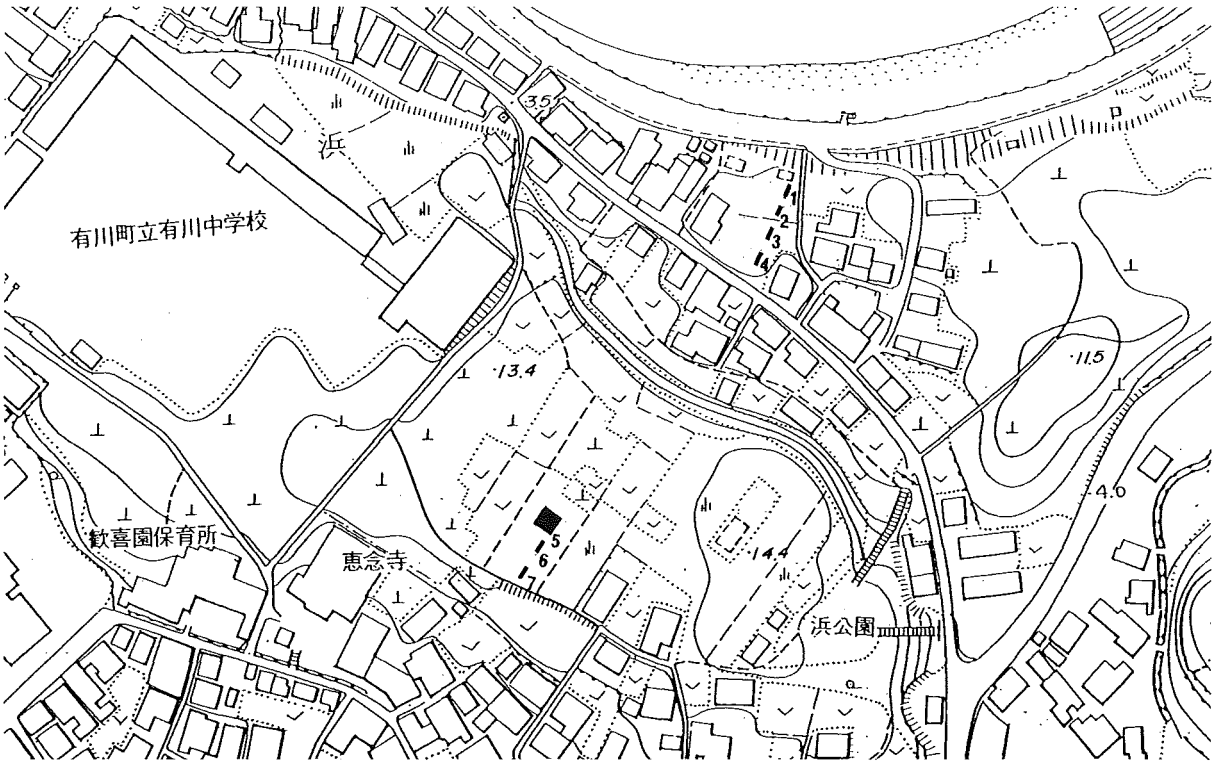
現在，砂丘の頂部を北西～南東方向に町道が縦貫し，両側には民家が立ち並ぶ。水道管や貯水槽の埋設工事に伴って多数の人骨が発見されたことで知られ，昭和42年と44年には九州大学・長崎大学・別府大学の合同学術調査も行われている。調査では甕棺や壺棺，石棺等の遺構から61体の人骨が出土し，貝輪や貝製垂飾品，玉類といった副葬品も伴っていた。

こうした遺跡の特殊性を鑑みて，本県では重要遺跡に選定したが，遺跡範囲は住宅密集地と重なり，今後住宅の建替え等に伴う開発が地下に及ぶことも予想されることから，遺構の平面的な広がりと遺物包含層の厚さを把握するために，確認調査を実施することとなった。また，浜郷遺跡と隣接する上原遺跡においても，墓地の建立や改葬等の開発が及びつつあり，併せて調査を行った。

調査は，北東～南西方向へ砂丘を横断するように，４箇所のトレンチ（略称：Ｔ）を設けて実施した。また，各トレンチには便宜上北から順に１～４の番号を付した。トレンチの規模は1.5ｍ×４ｍが３箇所（１Ｔ・３Ｔ・４Ｔ），1.5ｍ×３ｍが１箇所（２Ｔ）である。

土層はトレンチ毎に差異はあるが，次のように６層に大別できた。１層は黄褐色砂層で，近世の遺物が混入する。２層は淡灰褐色砂層，３層は褐色砂層，４層は暗灰褐色砂層，５層はしまりのある明褐色砂層，６層はさらさらの白褐色砂層である。各トレンチともほぼ共通するのは１・２・５・６層で，１・２層では近世以降の遺物が出土し，弥生時代の遺構・遺物は６層から出土した。

各トレンチの様相は次のとおりである。



調査坑位置図（S＝1／2,500）

最も海側に設けた１Ｔでは，２層で炭化物を含む層の堆積がみられたものの，他層からは遺構や遺物の出土はなかった。炭化物層は凸レンズ状の堆積で，検出レベルからみて近世以降の所産と考えられる。２Ｔは１Ｔと同様，これまで畑地として利用されてきた場所である。調査区北東隅の１層上面で，人頭大の礫を巡らし，赤褐色粘土を充填したエナ壺状遺構が確認された。２層以下では遺構や遺物の出土はみられなかった。３Ｔ・４Ｔは民家の敷地内に設けたトレンチである。３Ｔは地表下70 cmまで近現代の攪乱が及んでいた。２層では礫や骨・貝類に混じって仏飯器等の陶磁器が出土する。６層ではアワビやイノシシの下顎骨が見られた。周辺の精査を行ったところ，大腿骨と頭蓋骨が相次いで検出され，北西隅には壺棺も確認できた。壺は城ノ越～須玖式段階のものと思われ，人骨等もその頃に比定されるものと考える。

４Ｔも３Ｔと同じく，表層には近現代の攪乱が及び，北側では深さ1.7 mまで達していた。２層内には集石に混在して近世陶磁器や貝類が多数みられた。６層上面では，一辺が30 cmの平石と径1.5 mほどの円形遺構を検出した。平石を中心に，遺構を半裁したところ，深さは20～30 cmであることが判明した。ただし，遺物等の出土はなく，遺構の性格は不明である。

調査結果を総合すると，６層中に弥生時代の遺構・遺物がみられるのは砂丘頂部に近い３Ｔ・４Ｔまでで，海側に広がる様相はなかった。中世はほぼ欠落し，近世になって再び墓地等として利用されるようになったようである。ここに集落が形成されたのは早くても18世紀以降ではなかろうか。

上原遺跡は浜郷遺跡背後の低丘陵上に立地し，標高は13～14 mを測る。調査は，恵念寺の墓域の一角で，空き地となっている部分において実施した。丘陵を横断するように北東～南西方向へ３箇所のトレンチを設け，各トレンチには北から順に５～７の番号を付した。地形的には５Ｔから７Ｔにかけて，緩やかに下る傾斜を示す。トレンチは1.5 m×４mを基本としたが，５Ｔは後に調査の必要上

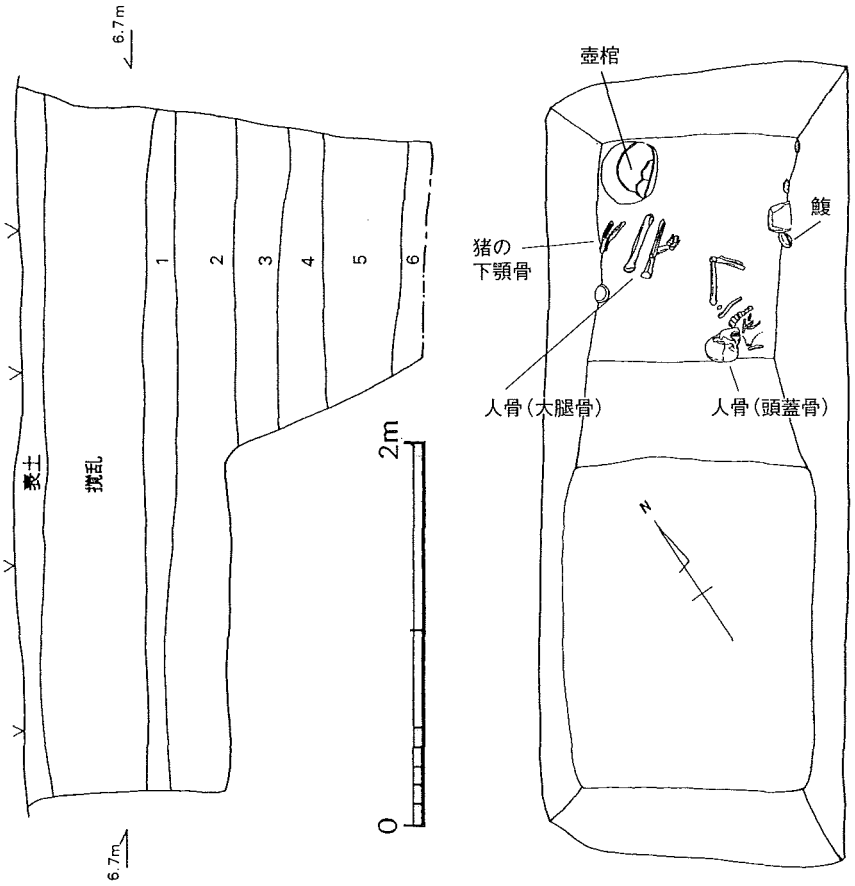
から6m×7mにまで拡張した。6T・7Tでは表土下10cmほどで赤褐色の地山があらわれ，削平や土取りで土がほとんど失われていることが判明した。丘陵頂部に近い5Tで，かろうじて地山直上に明茶褐色土の薄い堆積がみられたため，拡張して精査を行ったところ，ピット44基と遺物を確認することができた。ピットは径40～30cm大が3基あるだけで，20cm以下のものが大半である。深さは未調査のため不明。遺物は土器の底部片で，弥生時代中期前半頃と思われる。この他，表土からは中世の青磁や石鍋片も出土した。

人骨出土状況

上原遺跡は調査区より北西側では，墓地や学校建設等の開発によって遺構の大半は失われている可能性が高い。一方で，調査区の南東側は畑地が残っているものの，付近に寺跡があったことからみて，主体は中世と推測される。今後，弥生時代集落跡の発見が期待できるとすれば，5Tの北東～東側にある雑種地付近であろうと思われる。

まとめ

浜郷遺跡と上原遺跡はこれまで墓域と居住域という位置づけがなされながら，特異な埋葬習俗や豊富な副葬品から，浜郷遺跡のみにスポットがあてられていたきらいがある。今回，浜郷遺跡で弥生時代の遺構・遺物が出土するレベルは現地表より2m以上の深部にあり，遺存状態も良好なことが判明したことで，遺跡破壊の緊急性は薄らいだ。一方，上原遺跡は範囲や内容等についての情報不足が明らかになった。今後は巨視的に遺跡を捉えて内容把握を行う必要があると思われ，積極的に遺跡保護のためのデータ収集に務めたい。



T3検出遺構平面図及び西壁土層図（S＝1／40）

【調査担当：本田】（文責：本田）

報告書抄録

ふりがな	ながさきけんまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	長崎県埋蔵文化財調査年報 13
副書名	
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第 187 集
編集者名	和田政則
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570 長崎県長崎市江戸町 2-13 TEL 095-894-3383
発行年月日	西暦 2006 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長崎奉行所跡など 13 遺跡	長崎市立山 1丁目1番1号 ほか							

長崎県文化財調査報告書　第187集

長崎県埋蔵文化財調査年報13

（平成16年度調査分）

平成18年３月31日

発　　行　　長崎県教育委員会

長崎市江戸町２-13

印　　刷　　（有）正文社印刷所